



## GAP ニュースレター第51号目次

ホワイトサンズ事件(2).....ダニエル・フライ	1
生きるための助言(3).....J・クリシュナムルティ	9
マデリン・ロドファーの円盤実写映画.....	13
<GAP哲学研究講座>意識と惑星と人間.....久保田八郎	16
<改訳>空飛ぶ円盤同乗記(4).....G・アダムスキー	30
「声」.....	41
大阪支部大会, 盛況.....	44
群馬県で研究会開催.....	45
月例研究会案内.....	45
<予告>日本GAP総会開催.....	46

☆表紙写真はロドファー夫人撮影円盤映画の一コマ。詳細は十三ページ。

### ❁ GAPとは



GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々が空飛ぶ円盤の真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基ずいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コスミック・パワー”の御子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できるものです。

日本GAPの目的は円盤とスペースブラザーズ問題に関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト(接触)しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペースブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

◎GAP参加グループを有する国は次のとおりです。

アメリカ, オーストラリア, ベルギー, ブラジル, カナダ, デンマーク, イングランド, フィンランド, ドイツ, オランダ, インドネシア, 日本, メキシコ, ノルウェー, スウェーデン, スイス(ABCの順。1971年6月現在)

☆本誌掲載記事はすべて翻訳転載権取得済。禁無断転載。

円盤に乗せられたフライは  
驚異的スピードで空中を飛ぶ！  
その推進力のナゾは？……

# ホワイトサンズ事件

(2)

ダニエル・フライ

たしか君たちのあいだには「自衛本能こそ自然の基本的法則である」ということわざがあったはずだ。知識欲がときには動物本能に打ち勝つこともあるというのを見ることができたのは頼もしいことだ。君に警告を与えたとき、君の反応は自分で思うかもしれないような恐怖というものではなかった。純粹な恐怖の反応なら少なくとも一瞬間君のからだがかたまりついて動けなくなるはずだ。だが君はすぐに、しかも適当な態度で行動した。君がためらったという事実は、船体の詳細に関する注意力の集中がきわめて大きかったために、はっきりした退却路を確保しなかったことを示すにすぎない。

ここで私の話を信じてくれというのではない。それはわれわれにとつて最も好ましくないことだ。いま必要なのは証拠を（あらゆる既成概念に反するような証拠であっても）受け入れるだけの受容的な精神の持主と、その証拠を即座に吸収して筋道の通った結論に達するような精神の持主なのだ。体験したために君がまったく特殊な立場にあるにもかかわらず、君が静かに私の声を聞いて筋道の立った回答をしているという事実は、君の精神がわれわれのを見つけようとしている種類の精神であるという最上の証拠なのだ」

「お世辞をありがとう」と私は言った。「そのお世辞に値する人間ならよいのだが——。しかし君の言葉は地球人の科学的進歩をうながす何かの計画にぼくを利用しようとしていることをほめかしていた。なぜぼくを選んだのかね？ 君が着陸した場所にまったく偶然にぼくが居合わせたというだけのことじゃないか。この基地には科学的知識でぼくよりもはるかに進歩した人が沢山いるから、そのなかのだれにでも簡単にコンタクトさせられるんだけどね」

「君はまったくの偶然でここに居合わせたと言うが、それはわれわれを

ひどく過小評価した言い草だ。多くの地球人の脳は容易に送信できるが、君は受信もできるごく少数の脳の持主の一人なのだ。自分の宿舎へ帰って調べてみれば、今夜冷房装置が故障していなかったことがわかるはずだ。だが話をもとにもどそう。われわれは君の国の多くの一流科学者の精神を調べてみたんだ。大抵の場合、われわれは科学者たちの精神が既成概念という鑄型で固められていることを知った。彼らは遠くまで進みすぎている。その結果、遠い道のりをあともどりしなければならぬ。私の言う意味を比喻によってもっとやさしく言ってみよう。科学知識を求める人間は木に登るアリののようなものだ。自分では上方へ動いていることがわかっていても、その視野は狭すぎて幹全体を見通せない。そのため幹を離れていることに気づかないで下方の枝の方へ移動するかもしれない。いっときは万事うまくゆく。自分ではまだ上方へ登れるし、進歩という果実を少しつみとることもできる。だがその枝が急に無数の小枝に分かれていろいろな方向に葉がちらばっているために本人はまごつき始める。同様に、知識の探求者は常に確固たるものであった「基本的法則」がいまや分かれ始めて反対の方向にちらばり始めていることに気づく。すると科学者は心によって受け入れられる知識の限界に近づいていることや、あらゆる物理的な法則は究極的にはまったく統計的なものになるという結論に達する。これは地下鉄の列車に乗って行くようなものだ。たぶん最後には目的地へ着くだろうが、どこへ行くのかがわからないために、同じ場所へ着くのもっと短くて容易な方法があることをたしかめることができない。君たちの科学はいまこのような立場にある。たとえば地球の科学者は電子が粒子で波動性の二重性を持つものとして定義せざるを得ない状態にある。彼らは電子は確率波を持つ粒子だと言うことによってこれを正当化させようとしている。これは心によって描

くことのできない状態であり、そのため進歩の唯一の方法として抽象的な数学という地下道を通ることになる。

正しくながめれば基本的な真理は常に簡単に理解が容易である。だから幹の上からながめれば枝は「枝」として簡単な理解の容易なものになるのだ。てっとり早く言えば、君らの科学が進歩し続けようとする場合に必要なのは、君たちがとまっている枝から幹との分岐点まで降りて、ふたたび登り始めることだ。これをやろうとするのならわれわれが援助してやれるが、ただし君たちが援助を望んでわれわれが示す道に従うことができればだ。だがこれは未来のことだ。われわれが地球人を援助する前に二つの事が達成されねばならない。第一に、われわれの肉体が地球の環境に生物学的に順応することになること、そうすれば地球人のなかにはいり込んで間違えられなくなる。これには前にも言ったように少なくとも四年はかかるだろう（注。これは別な太陽系から来た宇宙人であるために、われわれの太陽系の各惑星の住民とは肉体的条件が異なるのである。アダムスキーの体験記類に出てくる宇宙人と混同しないこと）。第二の条件はもっときびしい。地球の各国間に存在する政治的緊張がやわらげられねばならない。地球の二大国がたがいに対して決定的な科学的優勢力を持つようになれば、当然絶滅の戦争が起こるだろう。われわれは戦争を起こす国を助けるために来るのではなく、戦争を起こす動機をなくすようなある程度の進歩をうながすために来るのだ。われわれも数千年昔自分たちの戦争の動機をなくしたのだ。だが——君は砂の中に立って科学や社会のあり方に関する話を聞くのにくたびれてきたらしい。

それで私の方がもてなし役だということ思い出したよ。船体の中へは行って少し飛んでみないかね？ これは遠隔操縦の輸送機なのだが、

単調ながらもまったく快適な二、三人用のイスのついた小さな乗員室もあるんだ」

「船体の中を見せてもらえればたいへんうれしいんだが」と私は答えて「しかも乗せてもらえらるとすればありがたい。しかしどうやってはいればよいのかね？ 船体の周囲を一周したが、入りらしいものが見あたらないんだ。しかも君は地球の大気に慣れていないと言ったじゃないか。ぼくが中へはいればからだといっしょに空気を持ち込むことになるはずだ。これは君に何かの影響を与えるんじゃないかね」

「前にも言ったように、この宇宙船は遠隔操縦の貨物輸送機なんだ。私はこの宇宙船内にいるのではなく、君が「母船」と呼ぶかもしれない司令船内にいるんだ。それはいま地球表面から九百マイルの位置にある。この貨物輸送機は地球の大気の見本を採集するのに使用される。それでわれわれは自分のからだをそれに慣らすことができるんだ。貨物船倉をからにすると取入口を開くとともに船倉は空気で満たされる。また空気中の細菌も研究や抗毒素の製造用に空気といっしょに取り入れられる。取入口は船体の頂上にある。さあそれを開くことにしよう」

船体の頂上からシュッとというような、つぶやくような音が聞こえた。私はその音の小さいのに驚いた。十五秒間でこの大きさの船体を空気で満たせるほどの大きな船倉ならば、すぐ大きな音が出るはずであるからだ。そこでこの船体はほとんど防音になっていることに気づいた。しかも吸い込まれる空気の音のほとんどは船体の内部で発するのであろうから、外にはほとんど聞こえないのだろう。

すると船体表面からカチッという音が一回だけ聞こえた。小さな音だがすぐどくて、シングル・アーム・リレーまたは小型ソレノイドの作動のために起こるような音である。

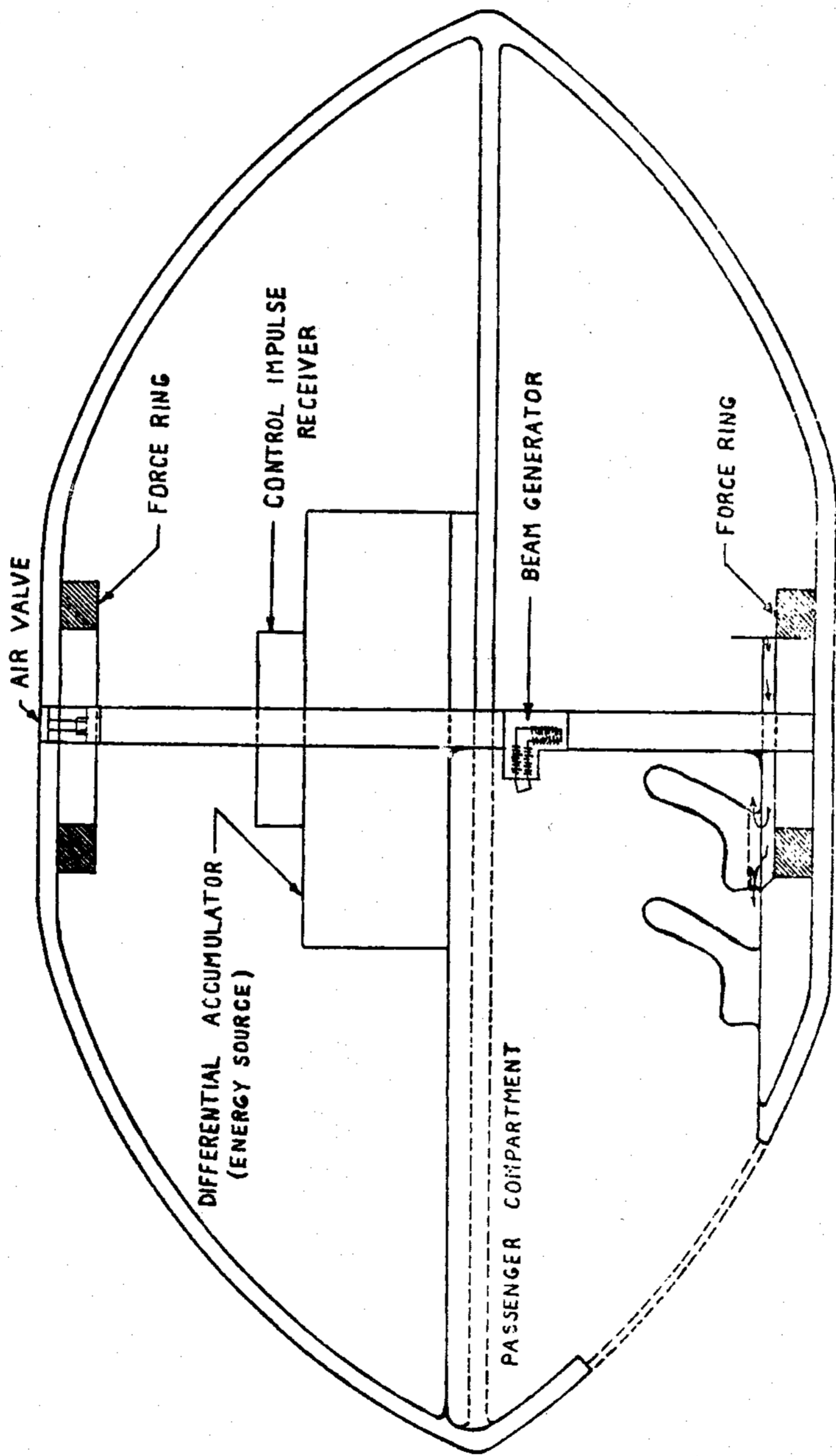
見ていると、そのうちに船体の左側の一部分が数インチほどひっこんで横に動き、船体の壁の中に消えた。すると高さ約五フィート、幅三フィートのタマゴ型の入口が現われたのである。私はその入口の方へ歩み寄って、頭を少しかがめながら入口の中へはいって行った。もちろん船体のわん曲のために私の足はまだ地面にあったが、頭は中へはいっていた。

のぞき込んで見た乗員室は船体の小部分を占めているにすぎない。奥行き約九フィート、幅は七フィートの部屋だが、床は地面上約十六インチの所にあつて、天井は床から六フィートを少し越える高さにある。壁はわずかにわん曲して、壁と壁との接合点は斜めになっているのである。角はない。もちろん私に最も近い角は船体そのものであり、内外に同じようにわん曲している。この壁は約四インチの厚さがあり、ドアがこの壁の中に引き込まれたのである。この部屋には四つのイスがあるが、それは地球の近代的な「からだにぴったり合うイス」によく似ている。ただし地球のものよりやや小型である。各イスは私が立っている入口にむかつていて、部屋の中央に二つずつ二列にならんでいる。イス類と両壁のあいだには通路ができています。

うしろの壁の中央の天井と接する所に管とレンズのついた箱のような物があるが、これは小型映写機に似ている。しかしフィルムのスプールやその他の可動部分は見あたらない。このレンズから光が出ていた。映写機から出るような光線ではなく散光状の輝きだが、べつだん強烈ではなく、しかも心地よくながめるのに十分な光量を放っている。

このイスと照明がなかったらガランとした金属製の部屋にすぎないが、これらが唯一の器具であるようだった。「これはどう見ても招待用の部屋じゃないな。まるで独房だ」と私は思った。

フライが乗った円盤の断面図



「前にも言ったように、単調な部屋だがイスはすわり心地がいいんだ。乗りたければ中へはいってすわりなさい。あまり時間がないんだ」と声が言った。

ほとんど自動的に私はキャビンの床に足を踏み入れてイスの一つに向かった。すわる前にカチッという音がして、背後の壁の中からドアがすべり出始めた。本能的に私はうしろの広々とした砂漠の安全な場所へ飛び出ようとするかのように半分ふり向いたが、ドアはすでにしまっていた。もしこれがワナだとすると私はもうその中にとじ込められている。のがれられないワナに対してもがいても無益だ。

「どこへ行きたいかね？」とまた声が響いてきた。今度は私のそばから聞こえるのではなく、むしろからだの内部から響いてくるような感じがする。まるで自分がしゃべっている言葉を聞いているかのようだ。

「君の持ち時間内にどこまでつれて行ってくれるのか見当がつかない。おまけにこの部屋には窓がないのでどこへ行こうとかまわらないよ。ぼくには何も見えないんだからね」

「君は見る事ができるんだよ」と返答があつて「少なくとも夜間に飛行機から見れるほどには見えるんだ。こちらのすすめを受け入れてもらえれば、君をニューヨーク市へ案内して約三十分間でここへつれて帰ってあげよう。約二十マイルの上空から見るニューヨークの夜景は、この地球上で最も印象的な光景だ」

「ニューヨークへ——そして三十分間で——帰って来る！」私は言った。「そうなる時速八千マイルになるぞ！ 一体どうやってこんな宇宙船にそれほどのエネルギーを出せるんだ？ このイスには安全ベルトもついていないじゃないか！」

「君は加速度から悪影響を受けることはない。実際には加速度というも

のを全然感じないだろう。とにかくすわりなさい。発進させるから。飛行中に何かわからないことがあつたら説明してあげよう」

私はドアに最も近い左前側の座席にすわつたが、それが実にすわり心地のよいものであることを知った。作られた材料はビニライトのカバーをつけたフォームラバーのように感じられたが、外側のカバーには縫目やつなぎ目がなければならぬのに、そんなものがないところを見ると、材質が何であるにせよ、たぶん一回だけの工程で型にはめて作ったものだろう。

するとまた声が聞こえてきた。「キャビンの照明を消してビューイング・ビームをつけよう」

瞬間、室内は真暗になった。そして映写機のような物がふたたび作動し始めた。今度は散光ではなく、映画またはスライド映写機のようなビーム（光線）なのである。このビームは可視スペクトルの最上端は濃い紫色である。これがドアの部分に広がった。このドアは最初のときのように壁の中にはいり込まないで、ただ存在しなくなったのである。少なくとも見た目にはなくなったのだ。まるで極上の板ガラスか澄んだ窓を通して見ているような気がする。

「この宇宙船やわれわれ宇宙人について君が知りたいと思う物事のすべてを完全に理解させるほどの時間はない。だが君にとって奇妙なと思われる基本的な原理を少し説明できるだろう」と声が言った——というよりも私の声があったのだ。なぜなら聞こえてくる音は音波として耳にはいつてくるのではなく、私の脳の中で直接に発生していることに気づき出したからである。

「君が見ていたドアは透明になったのだ。これで君は驚いている。なぜなら君は金属というものを完全に不透明なものとして考える習慣があ

るからだ。しかし普通のガラスは金属類と同じほどの密度があり、しかも固いのだが、それでもきわめて容易に光を透過させる。いまドアの金属の表面に作用しているエネルギーのビームは、いわば振動数増大器とでもいべきものだ。このビームは金属を透過して、そこへやって来る光に作用する。これは光の振動数が君がエックス線として知っている物と宇宙線スペクトルとのあいだの幅の振動数まで増大されるからそうなるのだ。このような振動数になると光の波はまったく容易に金属を通過する。そこでこの波がドアの内壁上で金属から離れるとき、ふたたびビューイング・ビームと相互に作用し合って、光のもとの振動数と同じであるいわゆる「ビート」振動数を生じさせる。そこで君は表面的には金属を透して見えているように見えても、実際には再生像を見ているのだ。君の準備ができたら宇宙船を発進させよう」

本能的に私は座席の中に自分をすっかりうずめて、両手でヒジかけをにぎった。一瞬の後に地面が突然すさまじいスピードで船体から下方へ落ちて行った。私は地面が「落ちて行った」と言うが、それは自分のからだに全然動きというものを感じなかったからで、しかも船体は岩のようにならぬのだ。このとき少なくとも一〇Gの割合で加速していたにちがいないが、私はジッと静止していたと断言できる。

小さな丘のむこうにかくれていた実験場の陸軍基地の燈火が急に視界にとび込んできて、母鳥から呼ばれたヒナ鳥たちのようにいっしょに流れ始めた。数秒後にはラスクルーセスの町の燈火が窓の左下方に見えてきて、わずか二、三秒間で少なくとも一千フィートも上昇したことがわかった。船体は上昇するにつれて左の方向へわずかに回転している。ラスクルーセスからエルパソへ続くハイウェイも見える。狭い道路だけけれども、そこを走っている無数の自動車のヘッドライトできらめくりボン

のように輝いている。エルパソとシウダド・ホアレスの燈火は地平線上的のかたまったにぶい光にすぎなかったが、上昇するにつれてそれが接近して種々の光の帯のように分かれてくるように思われた。プレシディオ地域を示す光の帯や、フォートブリスの無数の燈火、エルパソ下町地区の強烈な燈火帯なども見える。またエルパソをメキシコ側のシウダド・ホアレスから分けているリオグランデ川の薄黒いスジを識別できたとも思った。更に数秒間たって船体はなおも回転していたが、やがてこれらの都市の燈火がスクリーンの右手の端に消えてしまった。

ビューイング・スクリーンはいま南東の方に向かっていて、船体の回転はとまっている。もう地球の表面はかすかな緑色のリン光を発して輝いているように思われた。同時に船体の外の空はうんと暗くなり、星々の輝きは倍になったような感じがする。

「成層圏にはいったにちがいない」と思った。「そうだとすれば、十五ないし二十秒ばかりで十マイル以上も上昇したのだろう。だが加速の感じが全然しない」

「君はもう地表から約十三マイルの所にいる」と声がするのが聞こえる。「そして秒速約一、五マイルで上昇しているんだ。少し速度を落としたから空中から地上の都市をもっとよく見ることができよう。水平飛行をするために三十五マイルまで上昇させよう。その高度なら船体の動きに対してほとんど抵抗を示さないほどに空気が希薄になってくるんだ」「ところで」と私は尋ねた。「月はどうなったんだ？ ぼくが船体にはいったとき、月はちょうど昇ってくるころだった。まだ空中のどこかにいるにちがいないが、外は何もかも真暗だ」

「暗く見えるのは光を散らすほどの十分な空気がこの高度にないからだ。月がスクリーン上に直接輝かないかぎり、月光の形跡が君には見えない



だろう。月光は大気の上で非常に激しく輝いているので、私はわざと船体の回転をとめて月光をスクリーンに出さないようにした。月が見えてくるあいだに他の物を見るのは不可能ではないにしても困難だろう。君はもう垂直に水平運動を加えるほどの高度に達しているのだ。

このあと数分間は見ておもしろいものはないだろうから、ここで君をいぶかせていた二、三の物事について説明しよう。まず第一に、君は「安全ベルト」について何か言って、加速に耐え得るかどうかと考えた。これは君の惑星の科学者たちの心にはしばしば浮かんでくる疑問だ。

われわれの宇宙船が地球人から観測されるときや、宇宙船の速度や加速度について話が出るときには、必ず不信感が起こる。地球の第一流の科学者が次のように言ったのを聞いたことがある。「人間その他の高等生物がこの種の加速度に耐えられるはずはない」これは地球人の知性を評価する際にいつもわれわれを失望させる問題だった。地球の一般的な知識を持つ普通の知的な素人でさえも、この言葉をただちに否定できるはずだ。もちろんこの解答は簡単だ。船体を加速させるフォース（力）が、船体自体のあらゆる原子ばかりか内部に乗っているパイロットまたは乗員などの人体のあらゆる原子にも等しく作用するのだ。

地球の飛行機は状況がまったく違う。プロペラまたはジェットがついていて、それが機体の一部に推力を加える。この部分的な推力が機体を加速するが、パイロットまでは加速しない。パイロットは座席に密着している肉体の各部分を押しつける推力によって加速されるにすぎない。すると肉体の他の部分の慣性のために圧迫が生じて、そのために加速感が起こり、極端な場合は意識不明または肉体の崩壊が起こる。われわれの加速度の唯一の限界は、利用し得る力の限界なのだ」

「しかしこの場合は、なぜ私は落下する飛行機の内部の人間や物体のよ

うに空中に浮かばないのだろうか？」と私は思った。

「その答もまったく簡単だ。船体が動き出す前に君は座席にすわった。すると君の肉体と座席とのあいだに一つの引力が作用したのだ。船体と君のからだの両方を加速するこの力は等しい割合で物体に作用するし、地球の引力もこの両方に作用し続けているので、君のからだは座席のあいだのものと力はいつまでも残っている。ただし地球の引力が距離とともに減少するにつれてその力も減少する。

惑星と惑星のあいだを航行するときには自然の引力の源泉からはるかに離れてしまっている。それで実際的な理由によって、この引力を人工的に作り出す必要があるのだ。われわれが慣れている引力は地球の引力の二分の一程度にすぎない。これが、われわれが地球人の仲間になるのに多くの時間がかかるおもな理由だ。いまわれわれが地球の表面に着陸して、船体の保護装置をとり去ると、高い引力のためにわれわれの肉体内臓にひどい緊張が起こって、数日間で重病となり、ついには死ぬだろう。これは単なる予測ではない。過去に数度起こったために真実であることがわかっているんだ。われわれが受けているその引力をコントロールできる船内にとどまると、わずかながらも一定の増加力によってその力を増すことによって、われわれは補充組織を作り上げて筋肉を強化でき、やがて地球の引力もわれわれの引力と同じほど自然に利用できるよ

うになるだろう。そうになったら、君やオープンマインドを持つ少数の地球人がわれわれを援助して、われわれと君たちのあいだに存在している大きなフチに橋をかけることができるだろう。だが前にも言ったように、われわれは自分の知識や文化を地球人に押しつける気は毛頭ないし、地球人がそれを望んでいるというははっきりしたシルンが出てくるまでは地球人に近寄る

こともしない。

この地球探険の目的はまったくの博愛のためではない。地球人とわれわれの両方の進歩のために利用できる物質が地球にある。地球だけにあつてこの太陽系の他の惑星にはほとんどないような物質だ。われわれはこの物質の利用を望んでいるけれども、われわれの地球人に対する奉仕はこのような物質の利用次第でなされるのではない。こちらから与えられる知識または援助は自由に提供されるだろう」

「この宇宙船の作動原理を説明してくれないかね？」と私は尋ねた。「この宇宙船をこんな高速に加速できるほどのものすごいエネルギーをどうやって作り出すのかね？ またそのエネルギーを応用しているという形跡を外部に洩らさないで、どのようにしてそれを応用するのかね？」

「それを説明するには基礎物理学のまったく新しい原理を君に伝える必要がある。前にも言ったように、君たちの科学は一本の低い枝を知識という全体の樹木に代えていて、そのために科学がひどく複雑になっている。そこでこの科学が実用面で応用されると、できあがった装置は手が出ないほど複雑になる。たとえば、君の国の科学技術者はいまいわゆる原子エネルギーで推進する潜水艦の建造計画に従事している。(注)この記事はかなり昔に発表されたものである)彼らは原子炉を建造してこれをやろうとしている。その原子炉の中ではウランの軽いアイソトープが熱エネルギーと数個の中性子を放ちながら分裂し、これが他の重いウランに吸収されて、またそれが分裂する。かなり複雑だけれども、この方法は地球人がいままでに作り出した方法としては最も有効なエネルギー発生法だ。しかしこの熱エネルギーを宇宙船の推力に変えるために、彼らは原子炉の中に流動体を循環させようとしている。つまり熱変換器の中に流動体を循環させて圧力下に別な流動体を蒸気に変え、この蒸気

をタービンの中に通してタービンを回転させ、それによって発電機を廻して電力を得ようというのだ。もし彼らが三〇パーセントの総合的な効果をあげれば、これはたいした技術上の功績ということになるだろう。

だがもし彼らがもっと簡単な言葉で考えることができれば、現在持っている知識でもって核分裂炉のまわりに簡単な熱電堆を作つて、発生する温度変化を直接に電気エネルギーに変えることができ、少なくとも九四ないし九八パーセントの効果をあげられるだろう。これには可動部分はいらない、費用も安上がりで、エネルギー出力の単位あたり少ない物量ですむ。だがわれわれの方法に比べれば、この方法さえも不経済で複雑なように思われる。

君たちにとって最も必要なのは、自然の基本的法則または事実がまったく簡単だということを見出すことだ。そうすれば君たちは現在不可能に思われる物事を容易に生み出すことができるだろう。

地球の技術者が貨物または乗客の輸送用の乗物を作る場合、彼らは推力として乗物自体の中にエネルギー発生機を作る手段を講じる必要があると考へている。しかし地球人の祖先は数千年間船に乗つて地球のあらゆる場所へ旅行した。この船というやつは内部にエネルギー源を持たないで、まったく大気の運動のエネルギーによって動かされたのだ。これは必ずしも頼りになるエネルギー源ではないけれども、結構うまくいったものだから、自然界では多くのタイプのエネルギー発生源、かいつも利用できるのだということを地球人に気づかせたはずだ。だから望ましい結果を生み出すためにエネルギーの流出を見るような方法を講じさえすればよいのだ。(以下次号。久保田訳)

真の生き方を示す  
偉大な哲人の言葉

生きるための助言

(3)

ジッドゥー・クリシュナムルティ

知  
識

われわれは列車を待っていたが、それは遅れていた。プラットフォームはきたなくて騒がしく、空気はにごっていた。多くの人が待っている。子供たちは叫び、一人の母親は赤ん坊に乳を飲ませている。行商人たちは大声で品物を売り、茶やコーヒーが売れている。まったくあわたたしく騒がしい場所である。私はプラットフォームをあちこち歩いて自分の足もとや周囲の生命の動きを見つめていた。一人の男が近づいて来てブローケン英語で話し始めた。彼は前からずっとこちらを見ていて、私に何か言いたい衝動にかられたという。かなり興奮しながら自分はこれから清純な生活をするつもりだと誓い、この瞬間からタバコをやめるのだと言った。人力車夫なので教育は受けていないともいう。意志の強そうな目をして楽しそうな微笑を浮かべていた。

まもなく列車がやって来た。客車の中で一人の男が自己紹介した。彼は有名な学者で、多くの外国語を知っており、会話の中に自由にそれを用いることができた。かなり年輩で知識も豊富であり、裕福で野心的である。彼は冥想について語ったが、どうやら自身の体験から話しているのではないらしい。彼の神は書物という神であり、人生に対する態度は因襲的で従順である。あらかじめ予定された早婚を奨励し、生活の厳正な規律を重んじている。自分の階層を意識しており、社会の各階層の知的能力の差を意識している。自分の知識と地位について妙にうぬぼれの強い人であった。

太陽は沈もうとしており、列車はきれいな地帯を通過している。牛た

ちが家路につき、金色の砂じんが舞っている。地平線上には巨大な黒雲が出て、遠くで雷鳴がとどろいている。緑の野原は歓喜に満ち、わん曲した山のくぼみの村が何と心地よさそうに見えることか！ 暗黒がせまっている。大きな青いシカが野原で草を食べている。列車が通過しても見上げようもしない。

知識とは二つの暗黒のあいだにきらめく閃光である。しかし知識はその暗黒の上下を出ることはできない。知識はエンジンに対する石炭のよう技術に対して基本的なものであるが、未知なるものの中にまではいり込むことはできない。未知は既知の網の中で捕えられないものである。未知を存在させるためには知識をわきへしりぞけねばならないが、こいつはむつかしいことだ！

われわれは過去のなかに実体を持っている。われわれの想念は過去にもとづいている。過去は既知であり、過去の反応が常に現在に、未知に対して影を投げかけているのである。未知は未来ではなく、それは現在である。未来とは不安定な現在の中を突き進む過去にほかならない。このギャップ、この間隙が断続的な知識という光で満たされ、現在の空虚さを覆うのだが、この空虚さが生命という奇跡を支えているのである。

知識に対する耽溺は他の物に対する耽溺と異ならない。それは空虚さ、淋しさ、挫折、虚無などの恐怖からの逃避を与える。知識という光はデリケートな覆いであり、その下には心がつらぬくことのできない暗黒が存在する。心はこの未知を恐れるので、知識、諸説、希望、空想などの中へ逃避する。知識そのものは未知の理解に対する妨害物である。人間にとって知識をわきへのけることは恐怖を招くことになり、心を否定することでもあり、悲しみや喜びに対して傷つきやすくなることでもある。しかし知識をわきへのけることは容易ではない。無知になることは知識

からのがれることではない。無知とは自覚の欠乏である。そして知識は自我の道の理解が存在しない場合の無知なのである。自我の理解とは知識から自由になることである。

集積の過程、堆積の動機が理解されるときにのみ、知識からの自由がある。蓄積しようという欲求は安定しようという欲求である。同一化、非難、弁明などによる安定の欲求は恐怖の原因であり、それがあらゆる交りを破壊するのである。交りがある場合、集積の必要はない。蓄積は自閉的な抵抗であり、知識がこの抵抗を強化する。知識に対する崇拜は一種の偶像崇拜であり、それが人間の生活の闘争や悲惨を解決するのではない。知識というマントはわれわれを絶えず増大する混乱や悲しみから隠しこすれ決して解放してはくれない。心の持つ多くの道は真理やその至福の方向へつながってはいない。知ることとは未知を否定することである。

## 真理の探求

彼は数千マイルの長距離を船や飛行機でやって来た。自国語だけで話し、最大の困難をもってこの新しい不安な環境になれようとしていた。こちらの食物や気候にまったく不なれで、非常な高地で生まれ育ったために湿気が多い暑さがこたえていた。教養の高い人で科学者であり、著書も出している。東洋と西洋の哲学に精通しているらしく、ローマカトリック教徒でもあった。本人の話によると、長いあいだこんなものに満足できなかったが、家族のために信仰してきたのだという。結婚生活は

大体に幸福であったし、二人の子供を可愛がっていた。子供たちは遠い本国の大学にはいって、輝かしい将来が待っている。しかし彼の生活と行動に関するこの不満は多年次第に高まるばかりで、数カ月前に頂点に達した。そこで妻と子供たちのために必要なあと始末をして、いまここへ来たのである。やってゆくだけの金があり、そして神を発見するために来たのである。自分はアンバランスなところは全然なく、目的ははっきりしていると語った。

バランスというものは挫折した人や成功した人などによって判断されるべきことではない。成功した人もアンバランスかもしれないし、挫折した人はひねくれている。つまり彼らはある自己投影による幻影を通じて逃避を発見しているのである。バランスは分析家の手中にあるのではない。型にはまることは必ずしもバランスのとれたことを意味しない。「型」自体はアンバランスな教養の産物である。さまざまのパターンや型を持つ欲の深い社会は、左派だろうと右派だろうと、その欲望が国家のものだろうと国民のものだろうとアンバランスである。バランスとかアンバランスとかの考えはまだ想念の分野にあるので、判断はできない。みずからの基準や判断を持つ条件反射たる想念自体は真理ではない。真理は考えや結論ではないのである。

神は、それを（神を）探求することによって見つけ出されるものだろうか？ 人は知ることのできないものを探求できるだろうか？ 見つけ出すためには自分が何を探そうとしているかを知らねばならない。見つけようとして探すならば、見つけ出されたものは自己投影となるだろう。それは望んだものであろうが、欲求の創造物は真理ではない。真理を求めるとはそれを否定することである。真理は一定の住居を持たない。そこへ至る一定の道もない。言葉は真理ではない。真理は特定の場所、

特別な気候、特定な人々の中に見出されるものではない。ここにはあるけれどもそこにはないというようなものではない。ある人が真理へのガイドであって他の人はそうではないということもない。一体ガイドというものがあろうか。真理が求められるとき、発見されるものは無知から出て来るものにすぎない。なぜなら探求自体は無知から生ずるからである。人は実体を探し出すことはできない。実体の存在の探求をあきらめねばならないのである。

「しかし私は名のないものを見つけ出せるでしょうか。私がこの国へ来たのは、ここには真理を探求しようという大きな感覚があるからです。物質的にはここはうんと自由です。さほど多くの物を持つ必要はありません。ここでは他のように所有によって悩まされることがありません。だから人が修道院へ行くわけです。しかし修道院へ行くのは心理的な逃避です。私は隔離された場所へ逃避したくありませんので、ここへ来ました。名のなきものを見つげるために生活しながら——。私はそれを見つげる能力があるでしょうか？」

これは能力の問題だろうか。能力は特定の行為、予定された道に従うことを意味しないだろうか。このような質問をするのは、普通人としての本人が求めようとしているものを得るのに必要な手段を持っているかどうかを尋ねていることにならないだろうか。たしかにこの質問は例外者だけが真理を発見し、一般人は発見しないことを意味している。真理は少数者に、例外的に知性ある人にも与えられるのだろうか。なぜ人は自分にそれを見つげる能力があるかと尋ねるのか。われわれは真理を発見したと思われる人の実例を持っている。われわれをはるかに凌駕したその実例は、われわれの内部に不安を生じさせている。こうしてその実例は大きな意義があるように見せかけている。そしてその実例とわれ

われ自身とのあいだには争いがある。われわれはまた記録破りになることを望んでいる。「自分はその能力を持つか」という質問は、自分とは何かということ、実例はどのようなようにあるべきかということとの意識的または無意識的な比較から出てくるものではないだろうか。

なぜ人間は自分と理想とを比較するのだろうか。比較が理解をもたらさるだろうか。理想は人間自身と異なるのだろうか。理想は自己投影、自家製のものではないか。ゆえにそれは自分自身の理解を妨げるのではないだろうか。比較は自分の理解からの逃避ではないか。自分自身から逃避するには多くの方法があり、比較はその一つである。たしかに自分自身に対する理解がなければ、いわゆる真理の探求は自分からの逃避である。自分自身を知らなければ、求める神は幻想の神である。そして幻想は必然的に闘争と悲しみをもたらす。自分自身を知らなければ正しい考えはあり得ない。するとあらゆる知識は結局混乱と破壊にのみつながる無知同様となるのである。自分を知ることが究極の目的ではない。それは無限なるものへの唯一のキイなのである。

「自分を知ることがは極端に困難ではありませんか。長年月を要するのではないのでしょうか」

自分を知ることが困難だという考えそのものが、自分を知ることへの妨げとなるのである。困難だとか長年月を要するなどと考えるはいけなしい。それは（自分を知ることが）何なのか、何でないのかと予測することではない。とにかく始めることである！ 自己知（自分を知ること）は「相互関係の行為」の中に発見されるのである。あらゆる行為は相互関係である。自分を知ることが自己隔離、逃避などによって達成されるのではない。相互関係の否定は死である。死は究極の抵抗である。何らかの形の抑制、代用、理想化である抵抗は自己知の流出に対する妨害で

ある。しかし抵抗は相互関係、行為のなかに発見される。消極的または積極的にせよ、比較、正当化、非難、同一化等を伴う抵抗なるものは「存在するもの」の否定である。「存在するもの」は絶対的である。そして絶対的なものの知覚こそ、それを開放する。この開放こそ知恵の始まりである。知恵は未知なるもの、無限なるものの中へはいるための基本的要素である。（久保田訳）

みもとに

中山正史

来ませわが胸に

比類なき 輝ける栄光の歌

みもとに

狂おしくも冷静な歓喜の涙は 落つ

そのきずなの永遠に結ばれてあらんことを

そのきずなのはるか昔より結ばれてありしことを

わが人生においてなせる

もっとも美しき一つのわざ

みもとで

祝福され 歓喜に満ちた魂は

昇天より他になし

来ませわが胸に

つきることなき生命の清水

つきることなき久遠の調べ

金星型円盤の驚くべき出現!



# マデリン・ロドファアの

## 円盤実写映画

I G A P Ⅱ J

アダムスキーが撮影した一連の円盤写真や円盤実写映画はあまりにも有名であるが、更にもう一人すばらしい実写映画を撮影した人がある。その名はマデリン・ロドファア。彼女とその夫君はアダムスキーの良き協力者であり、親友かつ弟子でもあった。このフィルムが米国で公開されるや大センセーションをまき起こし、同時にアダムスキーの体験の確固たる傍証となつて、世界GAPのために万丈の気炎を吐いたのである。これに関しては本誌第三十四号に詳細な記事を發表したが、新しい会員諸氏のためにあらためてその一部を再録して、わが国ではほとんど知られていないこの驚異的事実を紹介することにしよう。

なお日本GAPは今秋十一月十九日の東京における総会で、ロドファア夫人撮影の円盤実写映画を公開する予定である。これは今年八月八日に日本テレビから放映されたフィルムのコピーであり、すでにござらんになった方もあると思うが、日本GAPは日本テレビの御好意により、このコピー製作の許可を得て鮮明な映画製作に成功した。同テレビの矢追氏が世界各地の円盤関係者にインタビューして取材されるにあたって日本GAPが米国GAP関係者を紹介した結果この大収穫となったのである。テレビで見のがした方はぜひ総会にご出席の上、この圧倒的なカラー円盤実写映画を觀賞されたい。なおこのフィルムは、アダムスキー撮影の円盤映画も含まれているという貴重なものである。

彼女とその夫はアダムスキーの友人だったし、アダムスキーが死ぬ前に会った最後の友人でもあった。夫妻はアダムスキーが病床にある最後の数日間を看護で過ごし、親しく話し合い、いけなくなってから病院へかつぎ込み、他界する直前にマデリンは「あなたの仕事を引きついでやります」と約束したのである。彼女は世界GAPのために次のように語っている。

「私は四十二才で（一九六五年現在）背が高く、美人ではありません。ペンシルバニア州で生まれ、これまでのほとんどはバージニア州の美しいシェナンドー谷に住みました。私はいままで官吏で医療関係の書記でした。子供はありません。夫も十九年間官吏です。私の言葉には少し南部なまりがありますし、言葉使いには十分に改良の余地があります。

こちらワシントンでは私は手ひどい目に会っています。あらゆる非難をあげられました。私のフィルムを見た政府の役人たちはそれが真実のものであることを知っていますが、何もしようとはしません。

私はフィルムを航空宇宙局の高官連や上下院の地位の高い人たちに見せました。多数の政府要人に手紙を出しましたが、そのなかには大統領、副大統領も含まれています。彼らが手紙を受け取ったことはわかっていますが、これは彼らに刺激を与えて、現在起こっている事実を認めさせようというわけです」

われわれは米国の別な情報源によって右のロッドフ

ファー夫人がやってきた仕事のことを聞いている。

町から町を旅して歩き、ときにはどこかのテレビ番組が中止になったという簡単な広告を見て、ひょっとすれば自分が出演させてもらえるかもしれないと思いついて、それに間に合うように夜に飛行機が列車にとび乗ったり、ときには講演でもらう手当だけを持ってテレビやラジオに出演してはアダムスキーについて語り、過去二、三年以上にわたって撮影された宇宙船のフィルム（アダムスキー撮影のもの）を見せたり、また最近メリーランド州の自宅の庭でアダムスキーと一緒に撮影した円盤の映画フィルムを公開したりした。

二月二十六日の撮影に際しては、その日の日中いつでもカメラを持って準備しておくようにとあらかじめブラザーズ（別な惑星の人々）から二人は予告されていた。そしてできれば一機の円盤が庭へ飛来することになっていて、写真がなるべく鮮明に写るように円盤のフォースフィールドを極端に減らす手筈になっていた。疑う人のために、動いている円盤を写すためである。

その日午後四時頃一機の円盤がやって来た！二人は最初それを居間の大きな屋根窓を通して目撃した。

「それは濃青色で、二十四メートルから三十メートルぐらいの高度でした」

円盤が前庭の一本の樹木付近の空中でゆっくりと振り運動を続けているときに二人は撮影した。フィ

ルムでは下部の球形着陸装置が出たりひっこんだりするにつれてフォースフィールドが円盤の均整美をくずしてしまっただが、典型的なアダムスキー型円盤である。

このオリジナル・フィルムの一部は、コピーを作るために一九六五年三月、アダムスキーがロチェスターへ行く途中、あるホテルに滞在中に盗まれた。「空軍や官憲のスパイが彼のホテルに網を張っていたとジョージは語っていました。

ジョージは私が撮影したフィルムをたいそう誇りにし、ワシントンの新聞記者やその他あらゆる人にそのことを話したので、みんなは心配し、フィルムがショックを与えるのを恐れていました。

彼はクリスマスまでの日にまったく子供のようにしゃいでおり、とても楽しそうだったので、ブラザーズがあんなに接近して撮影させてくれたのです」

このフィルムは多くの都市や町で公開され、マデリンが解説し、アダムスキーの体験を語った。六十局以上にわたるテレビネットワークが、マイク・ダグラス・ショーの時間にこのフィルムを放映した。

彼女はモントリオールへ旅してテレビやラジオに出演したが、一方アダムスキー撮影のフィルムはワシントンのテレビ局で二度公開され、一度はその直後に一群の円盤がワシントン記念碑の上空を旋回するのが見られた。

彼女の友人といえはすべて新しい友達ばかりで、大半が官吏だった古い友達はまだ訪ねて来ない。し



かし多数の新しい友が個人的に手紙や電話で連絡してくる。

罵倒はすいぶんある。特にテルビ放送のあいだか後に絶えず干渉してきた政府のある円盤調査機関のメンバーから少なからず罵倒されている。この機関は個人の人権と言論の自由を尊重している民主主義国の誇りを保つ国で、だれもが期待している道徳律のあらゆる教えを破っているのだ。彼らはこの記事を見て気づいたことと思う。そこでこの機関のリーダーに二、三の事実を知らせてやりたい。

マデリン・ロドファーはアダムスキーがそうであったように孤立してはいない。彼女はアダムスキーと同様に賛嘆と好意と援助のさなかにある。アダムスキーが力という商標と世界中の信奉者の支持とによって抵抗できたように、マデリンも男だけの特権ではない「忍耐力」と真相にたいする知識とでもって戦い抜くだろう。しかも彼女を支持するのにわれわれ（世界GAP）がついているではないか！

「他の惑星から来たブラザーズやシスターズは、地球人が歓迎しなかったからといって引き返してはいないことを私は知っています。ジョージは敵のために決してよろめきはしませんでした。私も絶えまなく努力を続けるつもりです。私が間違っているときはみなさんが指摘して下さい。私の自我は両親、夫、ジョージとどに迎合したことはありません。私が間違っているときはこの人たちがはっきりと指摘してくれました。女だからといってくじけないつもりで

す。あちこちでトラブルが起こってもそれを忘れて努力し続けます。

私はワシントンで運動を起こしました。まさか女がそんなことをするとは政府も思わなかった運動です。宇宙委員会の部屋で彼らは頭をたれてすわり、私やイングリッドを見ようとはしませんでした。（注）イングリッドはアダムスキーの弟子であったフレッド・ステックリングの夫人。夫妻ともGAPのために活躍した。現在はメキシコに居住（これは一九六五年一月にジョージの円盤フィルムを委員たちに公開した直後の光景です。私の撮ったフィルムは一九六五年四月に下院の少数の要人に公開しましたが、以来彼らとは絶えず接していませんし、実写フィルムを一コマずつ贈呈してあります。

多数の人が飛行機が円盤を追跡するのを見ていて、子供さえも見えています。そのことを議員たちに話してやりました。あらゆる人が一般の背後に隠されているものを見つけ出しているというのに、私は彼ら議員のまねはしたくありません。父はジョージが他界してから一カ月後になりました」

そうだ、マデリン・ロドファーよ、世界の人々はいまや隠されている真実事を知り始めているのだ。われわれはいつの日かあなたに会うことを願っている。あなたの重荷が軽くなった日に！

もしわれわれが秘密裏に圧力を受けるならば、まだ数年はのろのろと歩まねばならないだろう。ジョージ・アダムスキーは言った。「目標に近づけば近

づくほど敵はますます必死になって真相を隠そうとする」

敵とはだれか？ なぜ彼らはそうするのか？ それが義務なのか？ 誤って導かれた愛国心のせいなのか？ うぬぼれか？ 恐怖心によるのか？ 以上のうちのどれかだろう。

マデリンよ、もう一度言いたいことがある。あなたはこの戦いにおいて孤立してはいないということだ。あなたは多数の人々の好意と支持を受けている。その人々は古くさい心を捨てて、人々が他人の家を悩ませたり、古いウソにかわって出現する新事実を嘲笑したりすることのない新しい社会の出現を待ち望んでいるのだ。（ロナルド・キャズウェル）

写真はロドファー夫人撮影フィルムの一コマ、表紙写真の連続部分である。



●●●●GAP哲学研究講座●●●●

# 意識と惑星と人間

(1)

久保田 八郎

## まえがき

今回からGAP哲学研究講座を連載することにしました。これはアダムスキー著「テレパシー」「生命の科学」「宇宙哲学」等に述べられたいわゆるアダムスキー哲学を土台にして、それを詳細に解説補足して具体的な実践法や体験例なども加えた講座で、人間の生き方について宇宙的な見地から研究考察し、未公開の資料の発表と相まって、読者の皆様に人生の道標を提供しようとするものです。

この講座で「アダムスキー哲学」と称しないのは、発表するインフォメーション（知識・情報）のすべてが必ずしもアダムスキーから与えられたものとは限らず、かつ筆者の見解も加えてあるために、あまりに偉大であったアダムスキーの名を傷つけないようにしようという配慮にもとづいたためであって、本講座では特に「GAP哲学」と称しますが、基本的にはアダムスキー哲学からはずれるものではありません。

本題の「意識」とはアダムスキーの各哲学書で用いられている「宇宙の意識（または英知、パワー）」のことであって、一般的な意味での意識ではありませんからご了解下さい。したがって本題の意識は絶対至上な万物の創造主を意味します。この点についてはA氏の「生命の科学」をご参照下さい。

アダムスキー哲学とGAP間で呼ばれているこの非常に独自の哲学は、もともとアダムスキー個人が独力で樹立したのではなく、進化した別な惑星の偉大な人々から伝えられた宇宙的な生き方に関する思想を基礎にしているといわれています。またアダムスキーの哲学は単なる観念の遊戯ではなく、実生活の向上を目指した生活哲学ともいえるべきもので、

特に人体と精神との関係を詳説してテレパシーその他の特殊な能力の開発法を伝えているところから、これを単にアダムスキー哲学と称して西洋哲学史の系列に加えることはまったく無意味なため、むしろ「ブラザー哲学」と呼ぶべきですが、本講座ではGAP活動の意義を考慮して特に「GAP哲学」と称し、難解な哲学用語は避けてなるべく平易な文章で説くことにしました。

## 想念印象の観察が基本

アダムスキーの説いた哲学の実践法の根本をなすものは、何と云っても想念印象の観察にあります。これについてはア氏の哲学書で詳述してありますからすでにご存知と思いますが、実行する人が少なく、その意義についてよく理解されていない方が多いと思われまので、ここであらためて解説することにしましょう。

まず人体は超精密な送受信機であるということを明確に認識する必要があります。送受信機でなければテレパシクな印象感受、遠隔透視その他の超能力的な現象が発生するはずはありません。したがって人間の精神と肉体には密接な関係があつて、両者を分離して考えること自体が根本的に誤っていることは科学的にも次第に立証されてきています。現在のところ人間の思考というものがどのようなメカニズムによつて発生するかは、心臓を動かすエネルギーがどこから来るのかという問題と同様に医学上では未解決なナゾとなつていますけれども、どうしても否定できないある種の不思議な現象——テレパシクな感知、予感、遠隔透

視など——を子細に検討すると、想念の発生は肉体内部のメカニズムによる自由意志的な現象ばかりでもなく、外部からの影響を受けた結果として発生する可能性が大であることもわかります。もちろん物理的には光線をキャッチした肉眼を通じて物体の存在を確認する思考が起りますし、音波をとらえた耳を通じて外界の音響を知るわけですから、こうした受容器を通じての外界からの影響は常時受けているのですけれども、これ以外にもっと未知な放射線または波動というべきものが物理的に存在して、それを肉体の未確認の受容分子が感受していると考えるても不合理ではありません。たとえば、むかし終戦後まもない頃のある夕方、自宅の風呂にはいつていた私は突然激しい胸騒ぎが起つてしきりに兄のことが気がかりになつたことがあります。フィリピンの戦線で九死に一生を得て帰還した兄（異母兄）は当時精神錯乱状態となつて遠隔地の病院へ入院していたのです。その夜電報が来て兄の死を知らされたのですが、死亡時刻は私が入浴中に胸騒ぎの起つた時刻と一致していました。死ぬ直前に意識をとりもどした兄は私の名を呼び続けながら死んでいったことが後に判明しましたが、私が兄の強烈な想念を感受してテレパシー現象を起こしたと仮定することを非科学的だと考える人があれば、実はこのような現象はまだ序の口であつて、世の中にはもっとすばらしいテレパシー現象が多数発生しているのですよと申したいところですが、紙数の都合により詳細な実状は省略しますので、別な専門書をお読み下さい。

右の例からもわかりますように、人間が起こす想念は肉体内だけに限定されないで、何らかの物理的な形となつて外界へ放射されるらしいこと、その放射された想念を印象として感受するらしいことは明白な事象として科学的にも認められつつあるのでして、このことは米ソの科学者

がテレパシーの実験研究を行なっていることからわかります。テレパシー現象の発生理由はまだ不明ですが、多くの事実から帰納的に研究することはできません。しかしGAPの私たちが目標とするのはやたらと物理学の数式をならべたてることではなく、事実として展開している超能力現象を足かりとして人間の有する偉大な潜在能力を考察するとともに、人間を存在せしめている絶対的なるものの認識を深めることにあります。

アダムスキーによれば、この世界は全人類の放つ巨大かつ低俗な想念帯にとりまかれていて、各個人は何らかの形でその影響を受けており、そのために地球上の人間は習慣的想念のトリコになっているということです。このことを数式で証明せよという人にはこの講座は向きません。この記事をフィーリングをもってお読みになることを望みます。

さて、この習慣的想念というのが人間を不幸にする元兇なのであって、隣りの息子が××大学へはいったから、うちの息子もそれ以上の大学へ入れねばと、出来ない子供のシリをたたいて親が躍起になるならば、これがまず習慣的想念の一例となります。このカセから脱却するには現行の教育制度をのりたり否定したりすることではなく、人間の何たるかをちよつとでも考えてみるとよいのです。そもそも人間というのは何度も生まれ変わるのであるから、ある一生涯において××大学へ入学できなくても別な生涯でその機会はあるでしょう。習慣的想念によって他人のまねをしないことが救われるための第一のコツです。

皮相的な事象だけにとらわれて他人のまねをする段階を一步越えたならば、次に必要なのは高次な想念径路から来る印象を感受するように自己訓練をすることです。その高次な宇宙的印象の第一の径路は万物を生かす宇宙の意識そのものであり、第二の高次な印象は偉大な進化をとげ

た他の惑星の人々から送られる想念径路であり、第三の宇宙的な印象径路は細胞から細胞への通信です。ただしこの場合の細胞は宇宙的な記憶を保つ細胞であって、人間を迷わせる悪魔細胞ではありません。ところが人間は習慣的想念という強大な防壁を築いていて、外部から来る宇宙的想念の印象感受をみずから拒否しているのですから、結局低俗な想念に同調するだけで、わずかな物資や財産にしがみついて、それを失うまいとあせるのあまり闘争と不幸な人生をまねいています。

宇宙的な印象を感受するにはある程度環境にもよります。かつて私は若い人たちといっしょに喫茶店へはいったとき、耳の鼓膜が破れんばかりの大音響でジャズ音楽が鳴り響いているのに耐えられなくなり、いち早く逃げ出したことがあります。不思議なのは、こんなひどい騒音のなかで若人たちが楽しそうに談笑していたことで、これでは人間の感覚もマヒしてしまうでしょう。音楽といえば、オーラの見える超能力者X氏によると、音楽の音響にもオーラが見えるとのこと、クラシック音楽の高級なものほどオーラの色が良くて、低俗なジャズ音楽はオーラが悪いそうです。このX氏が私の家へ見えた折、談たまたま音楽の話になって、私が所有するレコード類のなかでどれが最も良いオーラを発するかと質問したら、X氏は間髪を入れずレコードボックスの真横から手を伸ばして（したがって氏には各レコードのジャケットの背の文字は全然見えない）「これです」と言いながら二枚組のレコードのはいったジャケットを引っぱり出しました。何とそれは私の最愛楽曲であるブルックナーの交響曲第八番ではありませんか！ 二番目にオーラの良い曲を尋ねられて氏がすばやく取り出したのはモーツァルトの「フルートとハープのための協奏曲」！ これらを宇宙的な音楽として愛好していた私のカンはあたたったわけです。こういうたぐいの音楽を流しているとスピーカ

ーから燦然たるオーラが室内に噴出しているのが見えるのだそうで、人体にも良い影響を与えるとはX氏の話です。余談ですが、ケイ光灯からはかなり有害な放射線が出ているのがオーラでわかるそうで、旧式の電球の方がよいとのこと。また植物はきわめて有益な生命放射線を出していますから住居の周囲に植物のあるような環境が好ましく、それが無理ならば窓ぎわに鉢植えなどをならべるとよろしい。カーテンの色は暖色系のものより寒色系のグリーン、青、紫などがよいのです。そして室内をなるべく静寂に保ち、高級なクラシック音楽がかすかに流れていて、鳥カゴからときおり小鳥の生命の賛歌が響いてくるというような優雅な雰囲気は決してキザではなく、宇宙的な印象を得るために大切なことですから、そうした環境づくりを心がける必要があります。

さて自己訓練として最も重要なのは、まず自分の習慣的想念のパターンを知って、それを序々に変えてゆくことです。目、耳、鼻、口その他の受容器によらないで人間は外部から来る印象を感受できるものではないとか、物質の財産こそ安泰な生活を送るための唯一の武器なのだという考え方を自分の習慣的想念にしてしまったのは教育内容にも原因がありますが、とにかく世界中の人間によって形成されている低俗な想念帯の大海の中を泳ぐ魚のような私たちは、よほどの意志と信念をもってまず自己の内界を直視してかかる方法を実行しないことには自分を変えることはできません。

そのためにはまず人間はソウルマインド（宇宙の意識または英知）とセンスマインド（肉体の心）との複合体であるということをしっかりと心得ておくことが大切です。ソウルマインドは人間を生かす根源的なパワーで、いわば宇宙の英知ですから絶対的なものですが、センスマインドは肉体の受容器中おもなものである目、耳、鼻、口などを通じて形成

される各個人の心であって、これは肉体の死とともに消滅する、きわめて不安定な頼りないものです。しかもはなはだしく利己的で、他との分裂感を起こしやすく、特に宇宙的印象の感受を拒否しようとする傾向があります。これは右の各器官を形成している細胞のなかに利己的な非宇宙的な想念を帯びているものがあるからで、これらを通して作られる心（いわゆる想念）が利己的になるのは当然です。何度も警察にあげられたことのある一人のスリがふたたび捕えられて警官から尋問されたとき、自分ではスリをやめようと思ってもこの右手が勝手に飛び出てどうすることもできないのだと泣きながら語ったという記事を読んだことがあります。この場合は本人の目と右手の細胞のなかに悪魔細胞がひそんでいて、それがセンスマインドに強烈な指令を発するわけです。スリとまでゆかなくても私たちのセンスマインドは好き勝手なことをしたがる赤ん坊みたいなもので、その駄駄をこねる赤ん坊に振りまわされながら、魂の目的に合致しない欲望の起るにまかせているのですから、これでは宇宙的な印象の感受はおろか物事の簡単な判断さえ容易にはできなくなります。

想念印象の観察は結局自分のセンスマインドをならしてソウルマインドと合体化せしめる手段の一つであって、これにより自分の内部の利己的な分子を次第に消滅させて中立状態にし、外部から来る印象の感受力を高めようというわけで、人間の進歩にとっては不可欠な方法です。

この想念観察法はアダムスキーが「宇宙哲学」の一〇一ページに「自己訓練法」と題して述べていますが、すばらしい方法ながらも簡単に記してあるだけで詳述してありません。そこで日本GAPは「想念観察手帳」を製作頒布していますが、これはだれでも容易に実行できるように「宇宙的」と「利己的」のページに分けて、更にそれをこまかい項目に

分類して記入の便を図ってあります。これによって日常わき起こる想念、印象、感情などをかたづけしから分類してチェックする仕組になっていきますが、一つ大切なことがあります。つまり利己的な想念が起こった場合、それを記入するとともに、ただちにそれを打ち消して宇宙的な想念に切り変えることが必要なのです。ただ宇宙的と利己的の二つに分けて記録するだけでは観察力は高まってもしかしやらないよりははるかによい。宇宙的印象の感受力が向上しません。そこで当初は利己的な想念ばかりが次々と起こるためにいやになるかもしれませんが、これはサビおとしみたいものですから決して失望しないで、希望を持ち続けながらただちに利己的な想念を打ち消して宇宙的想念に転換させるようにします。この「打ち消しの技術」が重要であって、このとき意志力と忍耐力が絶大な役割を果たします。つまりこの二つの力の行使は電圧をかけるようなもので、これは創造主が人間だけに与えた特権ですから、この特権を応用しないのはソンです。

このようにして利己的な想念を次第に宇宙的なものに変えるならば、やがて外界がパッと光り輝くように見える時が来ますし、直感が向上し、テレパシクな能力も少しずつ出てくるようになります。利己的な想念をただ宇宙的なものに切り変えるだけのことならなにも想念観察手帳を使用する必要はないと言う人があるかもしれませんが、しかしそれほどの段階に達した人がこの地球上に大勢いるとは思えません。やはり記録を行なってこそそれが進歩の手がかりになるのです。だいいちアダムスキーほどの人でさえ記録を実行したのですから、初めてこの方法を知った人がア氏と同じ体験を経ることなしに氏と同等かまたはそれ以上の境地に達することはまずないでしょう。大体にGAP哲学は絶対的の言い方でよいほど実行を必要とするのであって、実行をとまなわなない議論だけ

に、それもただなんとなく人間は神の子なのだという漠然とした考えだけに終始しているのではほとんど向上しません。先述のとおりア氏の説いたGAP哲学は、人間の持つ潜在感受力を引き出して人体を超高感度な受信機に仕立てあげていくことを目標としていますから、議論だけを百万だらとなえても無意味です。しかもその潜在能力は万人に内在しているのですから、意志力と忍耐力さえ用いれば、これはだれでもやれるすばらしい方法です。アダムスキーは生前この方法により相当な超能力を開発しましたが、能力自体については秘して語りませんでした。他人の平生を読み取る能力（いわゆるアカシク・レコードを感知する力）もあつたようです。

## 真の想念観察と生命の連続

想念観察はセンスマインドを抑制して宇宙的な印象を受感するための重要な方法ですが、これはテレパシクな生活をするための不可欠な手段でもあります。一般人は無意識に内部の印象や衝動に従って生きていますが、これはほとんどセンスマインドから来る非宇宙的な印象ですが、日常の行動に際して正しい指示を与えてくれず、結局ヘマばかりやるといふことになります。新しい取引先ができようとする場合に相手は信用できるかどうかはセンスマインドに頼るかぎり容易に的確な印象は得られません。そこで日常のあらゆる行動にはいる前に、一瞬静止して内部からわき起こる正しい印象の声に耳をかたむける習慣をつけるとよいのです。たとえばどこかへ重要な電話をかけてみようとする場合、フ

ラフラとやらないで、しばらく心を静めて、いまこの電話をかけてよいかどうかと自問して、その解答が内部から来るのを待つのです。「よからう」という印象を得て電話をかけた結果が思わしくなければ、その印象は誤っていたわけですから、正誤はあとの結果で判定すればよい。このようにして日常のあらゆる行動を意識的に印象に従いながら行なう練習をしますと、少しずつテレパシクな能力が出てきて失敗が減少します。手紙が来た場合もすぐに封を切らないで、中に書いてある事柄をテレパシクな印象で感知するようにしますと、感受力の向上に非常に役立つ練習になります。しかし前述しましたように、これらは想念印象の観察記録が土台となりますから、この訓練から始めることが肝要です。つまり内部の印象観察を日常のクセにしてしまうのです。こういうクセを身につけないでテレパシー能力が突然に出てくることはまずありません。一方、練習をすれば必ずそれなりの能力が少しずつ発現しますから、開発を望む人はぜひ実行にとりかかって下さい。

想念観察の意義は以上のとおりですが、これには更に重要な意義があります。真の想念観察は各人が自分の内部の意識（ソウルマインド、魂）の目的を知ることにあるのです。人間はこの世に生をうけて或る生涯を迎える前、すなわち生まれ出る前に、内部の魂が生まれ出る場所をきめています。偶然に或る環境へ出てくるではありません。ここにおいて生命の連続の法則が重要となってきます。よく転生とか生まれ変りといわれている現象が生命の連続なのですが、生まれ変りという一ライフスパン（生涯）と次のライフスパンとのあいだに断層があるような感じを与えますので、GAP側ではこれを「生命の連続」と呼んでいます。なぜなら人間の死から新生までにはほとんど時間を必要とせず、実体は（意識は）数秒間で移行してしまうからで、それは新生児が母胎から出

生する直前にその体内に定着するのが普通で、したがってこれは連続的なものであって、死後に霊界という場所で休息するのではないのです。ゆえにいわゆる霊界は存在しないことになります。ただし人間の実体である魂（とでもいふべきもの）を否定するものではありませんから、その点を誤解なきようお願いします。

さて、人間の実体（意識）が肉体の死後にいかなる両親のもとへ移行するかは（生まれ変わるかは）、実体の移行前にすでに実体そのものが決定しています。これはもちろんセンスマインドが決定するのではなく、選択権は実体にあるのであって、或る環境へ何のために生まれてきたのかはセンスマインドにはわかりません。実体（魂）そのものはセンスマインドの命令に応じることはなく、「こんな環境に生まれ出たのはいやだ」とセンスマインドが泣き叫んでもセンスマインド自体はどうすることもできません。したがって人間の真の自由意志とは「魂が環境を選ぶ自由」なのであって、センスマインドに自由があるのではないのです。だからこそセンスマインドをコントロールして「魂の目的」に従順にさせる必要があるわけで、その魂の目的を知ることが真の想念観察なので

す。

一般人は自分の魂の目的にほとんど気づいていません。なぜ自分はこの不遇な環境に生まれ出たのかと自己の境遇を悲しむ人があれば、それこそ大変な誤りをおかしているわけです。どのような環境に生まれたにせよ結局自分が選んだのですから、そのことに気づきさえすればよいのです。人間は何代も生まれ変わりながら生命の連続を遂行してゆきます。あるときは王侯貴族として、あるときは貧民としてさまざまの環境を選んで体験を積みながら次第に自己の魂の目的に気づくように成長してゆくのですが、永遠に生命の連続を保とうとするのならなるべく早く

宇宙の意識に気づいてセンスマインドをそれと合体させる必要がありません。さもないと十五、六回の生命の連続後は完全に消滅してしまいます。

生命の連続に関する一例をあげてみましょう。日本GAP会員でF君という人がいます。GAP哲学をよく理解した想念観察に熱心な青年で、精神的に高い発達をとげた立派な人です。この人は今生ではあまり恵まれた環境を選びませんでしたので高度な教育を受けられなかったのですが、ヨーロッパの中世の時代には建築家として活躍し、宮殿の建築に係っていました。この当時の生涯における建築学は独学で学んだのですが、技術は相当なもので、この頃に精神的にレベルの高い人に近づかねばだめだということを知りました。地球上で七、八回生まれ変わっていますが、二、三の例をのぞいて大体に恵まれた環境を体験しています。その中世ヨーロッパ時代に一人の妹がいて、この兄思いの妹が何かの事件で兄をかばうために自殺していますが、この女性が現在の妹さんです。何回かの転生を経て現世で再度めぐり合ったわけで、現在の兄妹もまれにみる美しい兄妹愛で結ばれており、高校三年生の妹さんもGAP哲学に熱心な立派な女性です。

同君は中国の明の時代にも建築家としての生涯をすごしており、しかも高官として皇帝に仕え、紫禁城の建築に功績をたてています。したがって同君がいま中国へ行って紫禁城を見るならば、過去の記憶がよみがえってなつかしさを感ずるでしょう。二代前の生涯では日本の関西に住み、武家として精神的なきびしい修練を積んでいます。その他中南米ですごした生涯もありますし、あるときは農民として、あるときはコピトとしてすごした生涯もありました。

以上は一例ですが、私自身の過去世もアダムスキーのそれもわかっています。しかしここでは省略しましょう。

こうみると人間の生命の連続にまつわる不可思議な運命と、転生の織りなす複雑な人間模様は、あらためてこの世の深遠さを感じないわけにはゆきません。

しかしここで非常に重要な問題が一つ出てきます。それはカルマ(業)の概念です。これは正しくはサンスクリットでカルマンといい、もとウパニシャッドの哲人ヤージュニャヴァルキヤが善悪の行為によって善悪の果報を受けるといふ必然的法則をとなえて以来、バラモン、ジャイナ教、仏教などで信じられるようになった因果応報の概念です。このカルマというのを「動・反動または作用・反作用の法則」と解すればそれによいのですが、後世では極端にゆがめられてしまい、一部の宗教信者たちによって人間の環境やその他あらゆる行為がすべて前生からの因縁だと考えられるようになりましたが、こうなるといけません。結局は無気力になって人間の創造的活動を低下させてしまいます。先にも述べましたように、人間が或る環境のもとに生まれ出るのは、魂の目的の遂行にとって今世ではこのような環境がよいとして魂自体が選ぶのですから、あくまでも自由意志にもとづいているのであって、何かの絶対的な圧力で自動的に決定されるわけではありません。人間の転生を説く人のなかにはひどくカルマにこだわるのがありますが、そもそも過去の事柄に執着すること自体が未来への前進を大きくはばむのであって、その意味では自分や他人の過去世をせんさくしない方がよいのです。過去はすでに過ぎ去って消滅したのですから、消滅したものに固執すれば逆行することになります。重要なのは「現在の一瞬」であって、この一瞬にこそ目覚めと変化の機会がひそんでいます。現在は過去の行為の結果であり、未来は現在の態度によってきまりますから、現在ほど重要なものはありません。「いまの瞬間から自分は大変化をとげよう」と決心したときが真



の目覚めの第一歩であり悟りへのプロローグです。

人間の生命の連続においては親子よりも兄弟姉妹のきずなが続くことが多く、何回かの転生後に再会するケースがあるようです。夫婦のきずなも偶然につくられるわけではありません。やはり前生と関係があるので、ただし今生で配偶者となる特定の一個人は前生から予定されているのではなく、前生の自分と同じ精神レベルの女性が今生で結ばれるのです。したがってそのレベル帯にある女性のなかのだれかが今生の妻となるのですが、これも偶然に出現するのではなく、自分の魂の目的の遂行に最適の女性を本人の実体が引き寄せるのです。ところがセンスマインドの欲望が強くて魂の要求に従わないでセンスマインドだけで一婦人を選ぶと、自分の魂の目的に合致しないことになり、夫婦間がトラブルで満ちることになります。また魂の目的に合致した相手と結婚しても片方が進歩しすぎるとうまくゆきませんから、その場合は協議によって円満に離婚して差支えありません。進化した惑星の人々でも離婚はあり得るということなのです。

今生において何かの仕事を行なっていて、ふと空虚感におそわれることがありますが、この場合は本人の魂の目的が大きいため、その仕事に目的の遂行に合致しないならば当然空虚な満たされない感じが起きます。しかしこの場合も心配する必要はありません。どんなにつまらなく思われる仕事でもセンスマインドを抑制して内部の意識（魂）と一体化しながら精一杯に遂行していますと、そのうち意識の指示によって自分に最適の仕事が見つかります。

さて、強烈な思念をすれば望ましい物事が実現するといわれています。これは一面では真実ですが、他面では誤っています。いかなる物事でもやたらと思念することによって実現するわけではありません。実現するの

は思念内容が魂の目的と一致した場合に限ります。強烈な思念さえすればだれでも総理大臣になれるかという点、そんなことはありません。総理大臣になれる人は魂の目的によって少数の人だけにその可能性が与えられているのです。したがって望ましいことを思念する場合は、自分の魂の目的に合った思念をする必要があります。病人が思念力によって病気を治そうとするのは差支えありません。本来健康なのが人間の魂の目的の一つであるからです。ただし病気によっては思念だけで治らない場合もありますから、そこは内部の意識からくる印象に従えば、物理的に適当な治療を受けるのに必要な最適の病院が指示されます。ここでも印象観察が重要な問題となってきます。

## 宇宙の意識との一体化実習法

宇宙の意識（英知、パワー、創造主）と自分のセンスマインドとを一体化させる方法としては想念観察法を基本としますが、これをもっと積極的に進めるためのすばらしい方法がありますからお伝えしましょう。本誌第五十号の四十一ページに、例会で行なった「一体化実習」なるものが紹介されていますが、あれは初歩者向きではなく、相当な理解を持ち訓練を積んだ高等者向きの訓練法ですから、失礼ながら初歩者にはおすすりできません。指導者なしで一人で実習すると、へたをすれば危険を生じる恐れがありますので、中止して下さい。したがってこの実習法は現在例会では行なっておりません。それよりも同誌に掲載の「スペース・プログラム」と題する記事で二十六ページ下段の左端から二十七ペ

ージの上段右端にかけて「だれでもやれる未発表のすばらしい方法を後日お伝えしましょう」とありますが、これから述べるのがその方法です。人体を生かしている宇宙の意識（英知、パワー）の存在を最も端的にあらわしているのは何でしょう？ それは心臓の鼓動です。七、八十年もあの小さな心臓を動かし続けているエネルギーがどこから来るのかは医学的にはナゾとなっていますが、これこそ宇宙のパワー、英知の現われなのであって、まずその現象に着目することが肝要です。

次にこの宇宙のパワーは人体だけではなく、あらゆる生物をも生かしている事実を認識します。それは小鳥一羽、草花の一かけらさえ人間の手では絶対に作れないという素朴な驚異を感じる人ならば、容易に認識できるはずで、ゆえにあらゆる生物も人体と同様に体内が脈動しており、あらゆる生命の存在のシルシはこの脈動で表現されています。

このような生命体の一つとして樹木に着目します。樹木も立派な生物であり、その内部には生命の脈動があるのです。そこで庭か森へ行って一本の樹木を定めてから、それに接近し、見つめながらその樹木の脈動を自己のフィーリングによって感知する練習をします。このことは自己内部の意識と相手の樹木を生かしている宇宙の意識とが一体化することを意味しますから、結局これは宇宙の意識との一体化実習ということになるわけです。このときは目や耳などに頼らないで内部の意識に頼るのですから、各感覚器官によってセンスマインドが「ばかばかしい」という叫び声を出して妨害するならば、それを極力抑制しなければなりません。あまりに目が邪魔するようならば閉じてもよいでしょう。ただし注意すべきは、自分の心臓の鼓動に心を集中させないことです。集中させると鼓動が激しくなってしまうのは心臓病になります。心臓の鼓動は一つの例としてあげたにすぎません。

この練習を続けますと次第に樹木の内部にひそむ感覚的なものを感知するようになり、脈動が感じられるようになってきます。うんと進歩すれば樹木と意志伝達ができるようになるはずで、樹木にも意志や感情があることは科学的に立証されており、これは来たる十一月十九日の日本GAP総会で橋本博士がサボテンを用いて実験される予定ですから、ぜひごらんになって下さい。超能力者X氏の話によりますと、ある日ふと自宅近辺の樹木らしいものから「自分はこんな所におりたくない。早くどこかへつれて行ってくれ」という想念が発せられたような印象を受けたので、窓を開いて丘の上にある一本の樹木にむかって「おまえか？」と問いかけたら、風もないのにその木が全身をばさばさとふるわせたという事です。そこで考えてみると、そのあたり一帯は宅地造成のため土が掘り返されて樹木群がかたっぱしから引き抜かれていたので、生き残ったその樹木が悲痛な想念を発したのだらうと話し合った次第でした。ところで樹木の意識との一体化がすすめば練習者はテレパシクな感受力が開発されつつあることにもなりますから、これはテレパシクの練習にもなるわけです。大きな樹木でなくても根のあるものなら鉢植えの小さな木でもかまいません。練習相手の木を写真に撮影して、その写真を持ち歩きながら一体化の練習をしてもよろしい。距離に関係はないからです。ただし実在する樹木に限ります。ありもしない木を空想してはいけません。

大切なのは相手の樹木の物理的存在を明確に認識するとともに、自分の肉体的存在をもはっきりと自覚することです。この練習は樹木というフォーム（形態）と人体というフォームを無視することではありません。むしろフォームが生命の現われであることを感知するのが眼目ですから、物質、特に人体を無視してはいけません。宗教によっては物質無、

肉体無と説くのがありますが、これは誤りで、人間は物理界に君臨しているのですから物理的法則を重視する必要があります。したがって極端な精神主義は間違っています。人体や樹木のごとき生命体からは一種の放射線が放射されているのですが、これは現段階の物理学では解明不可能であるにしても究極的には物理的なものであって、絶対に不可解な漠然とした形而上的なものではありません。そうでなければ樹木も人体も物理的な法則のもとに育つはずはないのです。

肉体を大切にすることは人間の進歩にとって重要です。「健全な身体に健全な精神が宿る」ということわざがありますが、これは良き想念を起すための真理をあらわしています。「なんじ自身を知れ」という言葉もあります、これは自分の想念パターンを知ることばかりでなく、自己の肉体の存在を知ることの意味しているのです。ところが一般人は自分の肉体の存在を感じているようでありながら、実は日常生活の大半を肉体を無視して忘れ去っています。スペースブラザーズは自分の内部に宿る宇宙の意識ばかりでなく常時肉体をも意識しているのであって、そうしてこそ自己を完全に表現できるのです。

ですから私たちも極端な精神主義に走ることなく、適度に運動を行なうって肉体のバランスをとることが大切で、特に入浴は血液の循環をよくしますから、これによって想念もよくなってきました。アダムスキーの「テレパシー」には、テレパシー受信訓練の際は身体をリラックスさせる必要があると説いてありますが、このリラックスした状態はちょうど湯上がりのときの爽快な状態にたとえればピタリです。全身をだらりと休ませるのがリラックスの状態ではありません。また極端な精神主義者になりがちな菜食主義、酒その他の刺激物の忌避、禁欲等も身体のバランスを失わせがちで、特に刺激物は絶対に不可というようなものではなく、

適度にやるのは一向差支えありません。

人体の諸器官中、特にホルモン分泌腺が重要で、これが記憶の貯蔵庫として、また超能力の開発分担機関として大切な役割を果たしますが、このことは現代医学ではまったく知られていません。その意味からも肉体の健康を保つのは想念を観察するのと同様に重要なのです。

## 聖書はコンタクトストーリー

聖書の話に移りましょう。旧約聖書を一応別問題として、いわゆる新約聖書は約二千年間キリスト教の教典とされています。そしてこの書に述べてある教えは大体にイエスキリストが弟子たちに伝えたもので、それらは神の言葉と考えられて世界のキリスト教信者の中心思想となっています。またイエスキリストなる人物はナザレ村のヨセフの婚約者であった処女マリアが聖霊によってみごもったとの告知を神の使いから受けて生んだ子で、それがイエスと名づけられて後にキリスト教の始祖になったということにキリスト教信者はいささかの疑惑も起こしてはいません。むしろ聖職者のなかにはイエスとは神が人間に化身してこの世に出現したものであると考える人もあります。その思想の根底にはイエスと一般の人間とのあいだに次元の相違があつて、イエス対信者とは神対人間の関係があるような印象を受けます。果たしてそうでしょうか。一体、処女が人間を生む可能性があるでしょうか。宇宙の創造神が或る特定の人間に化身して現象化することがあり得るでしょうか。

これにたいして爆弾声明を出したのがアダムスキーで、彼の著書「空

飛ぶ円盤の真相」(高文社刊)の第十章「聖書と円盤」によると、聖書中には別な惑星から来た人々の訪問に関する記事が数百箇所も出ており、この聖書なるものが実は古代のコンタクトストーリーなのだと言っています。この詳細は同書をお読みになればわかりますので、ここではその反覆を避けて、アダムスキーが同書で触れていない各種の事実をお伝えしましょう。もちろんこれは私個人の推測ではなく、或る方面から与えられたインフォメーションです。

まず、聖書——特に新約聖書——は、もともとキリスト教の教典として作られたものではなく、古代において別な惑星から来た偉大な人々と当時の地球人で高度な発達を上げた人々とのコンタクトストーリーであるということをご断言しておきます。すなわちこの書は現代においてアダムスキーという傑出した人物がスペースブラザーズとコンタクトして宇宙の法則やスペース・プログラム(地球救済計画)を伝えられたのと同様な事実が古代にもあったことを述べた記録なのであって、いわば「空飛ぶ円盤同乗記」や「生命の科学」の古代版であるとみてよいのです。

イエスとは一体だれなのか? これは現代に至るも実証史学の面ではナゾとされていて、多数の歴史学者によりさまざまな説が出されていますがキメ手はありません。実証歴史学の対象として研究したD・F・シユトラウスはイエスを歴史上の一人物とし、福音書は神話にすぎないと言い、ケルソスはイエスをローマの兵士とユダヤ女のあいだに生まれた私生児と断じ、B・パウアーに至ってはイエスなる人物の歴史的事実をさえ否定しています。だいいち、あれほどに民衆の支持を受けて聖書という重要な文献のヒーローにされたイエスが、当時のローマ側の文献にまったく記録されていないのがナゾであって、こうなると多くの学者が

イエスの実在を疑惑の目で見るのは当然です。

端的に申しましょう。イエスとは当時の或る予言者のことなのであって、この予言者が後世の信徒たちからイエスキリストと称されるようになったのです。この偉大な人は現代のアダムスキーのごときコンタクティーでした。その彼が当時地球へ来ていた約二十名のスペースブラザーズのティームとひそかにコンタクトしながら、ブラザーズから教えられた宇宙の法則を人々に伝えていたのです。現代に残る聖書は当時の事実がかなりゆがめて書かれたもので——というよりは非常に巧みな比喻を用いてカムフラージュされたもので、その文章がウのみに信じられたためにキリスト教の教義自体に相当な誤解が生じています。一処女が神のお告げにより子供を生むというような不合理なことは宇宙の法則からみても絶対にあり得ないことですが、他の惑星へロケットを飛ばす現代でさえも多数の人がこのことを信じているのですから、聖書の正確な解釈が困難なのも無理からぬことです。

さて予言者はいつのまにかイエスキリストにすりかえられたのですが、彼の協力者で弟子であった人々はこの偉大な教えを広めるのに活躍しました。しかし弟子の数は十二人どころではなく、少なくとも百人はいたはずで、聖書でなぜ十二人に限定されたかといいますが、これは太陽系の十二個の惑星を象徴的にあらわしたもので、反逆のユダは実は地球を意味しています。つまりユダがキリストに反したのは十二個の惑星の内地球だけが宇宙の意識に従わなかったという意味なのです。もとはスペースブラザーズがコンタクティーやその協力者たちから救世主と呼ばれていたのですが、予言者自身も偉大であったために、ついには彼がキリスト(救世主)と称されるようになり、そのため一人のキリスト像ができあがってしまったわけです。彼が洗礼をほどこしたというのは、

宇宙の意識と一体化せよと説いたことを意味します。こうしていわばG AP活動の古代版が展開していたのですけれども、ローマの官憲の圧迫が激しくて、ブラザーズ—予言者—協力者という径路で伝えられた宇宙的なティーチングズをそのままの形で残すのが困難なために、非常に苦心してカムフラージュされた文章で残しました。これが新約聖書です。だからこそ聖書は聖書学者を悩ますようなわけのわからぬ言葉で満ちているのであって、その最たるものは「ヨハネ黙示録」です。この黙示録をそのまま読んで真意のつかめる人は世界中のキリスト教信者中にも一人もいないでしょう。黙示録のヨハネもコンタクティーでした。

その黙示録の中に「四つの生き物」という言葉がしきりに出てきますが、これは実は「肉体の四つの感覚器官」を意味するのです。また「七つの金の燭台」は「七つのホルモン分泌腺」を、「二十四人の長老」は「二十四の神経系統」を意味します。「御座についている方」は「宇宙の意識」のことですから、たとえば黙示録第四の九—十の「また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座についている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、二十四人の長老は御座についている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。『主よ。われらの神よ——』」を正しく解釈すれば、「肉体の四つの感覚器官が宇宙の意識に従うとき、二十四の神経系統も意識によって偉大な力を発揮するようになる——」というような意味になるのであって、この黙示録はアダムスキーの書いた「生命の科学」と内容がほぼ同じもので、人体と宇宙の意識との関係を説いた偉大な生命哲学書であるのです。また新約聖書は当時のブラザーズによるスペース・プログラムの意図や予言を含ませた、しかも巧みにカムフラージュされた計画書でもあったのです。

新約聖書中には世界の終滅説が述べてあるように見受けられるために、これを大抵のキリスト教信者は一大天変地異の発生の予言と解釈しているようですが、これも誤りで、これは大変災の発生ではなく、「人間のセンスマインドが宇宙の意識と一体化するならば、肉体内に大変化が起こる」という意味のことを比喩的に述べたにすぎません。大体、聖書のどこを見ても自然界の大変動発生を予言した部分はないのです。現実のスペースブラザーズは古代でも現代でも大変動発生の子言によって地球人に恐怖心を起こさせるようなことはしません。このような説をとねえるグループがあればニセモノとみて差支えありません。

新約聖書中で弟子たちが書いたとされている書簡その他の記事は、各自の宇宙哲学の実践体験記なのであって、これが見事な比喩で書いてあるのです。そしてスペース・プログラムが遠い古代から一貫して行なわれてきたことを物語ってもいます。旧約聖書にもコンタクトの記録がありますが、特にそれを明確に記述しているのはエゼキエル書です。さて、当時予言者とコンタクトした約二十名のスペース・ブラザーズの内、一人は中近東を経てインドに達し、このインド滞在中に宇宙哲学を説いているのですが、この人がシャカムニと呼ばれた人で、これは更に日本にまで足を伸ばして現在の青森県で没しています。そうすると予言者とシャカの時代が歴史的に合致しないことに疑問が起こるでしょうが、時代のズレは後世の歴史家の推測によるもので、実際には同時代なのです。シャカにしてもまったく伝説と神話に包まれていて、経典の解説だけでは真相がつかめません。換言すれば、それほどに地球人は伝説作りの名人だということになります。結局、地球人は偉大なるものを神秘化させる傾向が強いわけで、特に日本人はそれが著しいのですが、これについては次号で述べることにしましょう。

## 質疑応答

問 想念観察を行なうのには職業柄想念観察手帳を使用することができません。この場合はどうすればよいでしょうか。

答 手帳を使用する余裕がなければ、常時自分の想念観察を行ないながら、非宇宙的利己的な想念がわき起こるたびに、すぐにそれを打ち消して宇宙的な想念に切り変えることによいでしょう。この「打ち消しの技術」を積極的に応用することは非常に重要です。これをやらないと進歩しません。打ち消そうにもどうしても非宇宙的な暗い気分におそわれるときは、ア氏の哲学書のどの頁でもよいから開いて少し読むか、または一時休息して戸外に出て無限の天空を過ぎ見たり、地上の植物に近づいて手を触れてみて下さい。必ず宇宙的な晴れやかな気分が起るはずで、手帳の使用が不可能な場合でも、絶えず自分の内界を見つめて想念印象の変化に注意する習慣を身につければ、結局自分の想念を客観視し批判的になるようになり、これが宇宙的な性格の人間になる第一歩です。いわゆる無念無想の冥想はよくありません。単なる冥想は心霊的になりやすく、宇宙の意識との一体化にとって有害です。

問 いわゆる幽霊現象はいかなる理由で発生するのですか。

答 これは死者の残留意識が目撃者のホルモン分泌腺に吸収された場合に増幅されビジョン化されると考えられるのですが、非常に複雑な問題で簡単には説明できません。ただ言えるのは、従来の心霊学でいわれている説はすべて誤りであるということだけです。

問 アダムスキーは人間の靈魂の存在を否定しているということですがこれについては？

答 これは非常に誤解されています。彼は心霊学でいう「靈界」の存在を否定しているのであって、肉体を生かす実体（意識）は実在し、肉体の死後も生命の連続をとげると言っているのです。

問 超能力（テレパシー、遠隔透視、オーラ透視等）を早く開発する秘法をご存知なら教えてください。

答 特別な秘法は存在しません。やはりアダムスキーの説く想念観察実験から始めて忍耐強く年月をかけてじっくりと練習をしないとだめです。これは外国語の習得に王道がないのと同様です。ただし外国語の習得は方法によって習得速度に若干の差が出てきますが、超能力開発にも正しい練習法を実行することが大切です。その基本的態度としては1.超能力を持ちたいという強烈な欲求を起すこと。2.その欲求の持続として信念を持ち続けること。3.しゃべらないこと。4.意識を肉体から解放すること。5.肉体から脱出して目を宇宙に向けること、などがあげられます。先天的に超能力を持つ人がたまにいますが、これは生命の連続によって過去世から持ち越された才能です。

問 印象観察の一方法として、睡眠中に見る夢を記録して、その意味を分析すると有益です。

問 英語の習得法でよい方法をお知らせ下さい。

答 何といっても外人の吹き込んだ録音テープを聞いてはそれを自分で声に出してまねる練習をすることが先決問題で、このようにしてまず耳をならすことから始まります。印刷された文字だけに頼ってはいけません。テープを聞く回数が多いほど上達が早いという関係があります。そのためには小型テープレコーダーを常時手から離さないようにしてテ

語学ばかりではなく、アダムスキーの各哲学書を自分で朗読してそれをテープに録音し、室内に流しますと、ただ黙読するよりも早く理解できます。そうすれば室内の雰囲気もよくなってきます。

問 アダムスキー問題を扱っている或るグループの機関誌に、アダムスキーに会ったことのあるという日本の一学者が、日本GAPには特別な使命はないのだとか、代表がアダムスキー活動とは関係のない人であるような意味の発言をしていますが、これについてはどうですか。

答 とんでもないことです。日本GAPばかりか、この世のあらゆる人間個人にはみな各自の魂の目的があり、それぞれ特殊な使命を帯びて生をうけたのであって、そのことを気づかせようとするのがアダムスキー哲学であり、その哲学の推進活動を行ってきたのが日本GAPです。私の力は微力でしたが、多数の方のご協力により日本における世界GAP活動の役割の一端を果たしてきたと思います。

アダムスキーがGAP機構を設立するにあたり、彼は各国の熱心な信奉者のなかより原則として一国から一人だけをコーワーカーとして選びました。日本で私がコーワーカー（協力者）に指名されたことは、彼から私宛の署名入りのぼう大な数の書簡で証明され、これらは法的にも有効であって、なんぴとといえども否定できない事実です。

GAP開始当時日本からも少なからぬ人が彼宛に手紙を出したにもかかわらず（これらの手紙は後に彼がパロマーガーデンズから他所へ移動した際に私宛に回送されてきました）なぜ彼は日本では私を選んだのか？これには実はアカシック・レコードに関連した深遠な問題がひそんでいたものであって、彼の単なる好みで決定したではありません。アダムスキーに会ったという人は世界中で数万人はいるはずですが、会ったというだけでは何にもならず、問題は哲学の実践にかかっています。（以下次号）

へまじめに研究される方のために

日本GAPは単なる円盤目撃の調査研究だけにとどまらず、今後はGAP哲学の研究に主体をおいて活動を展開してゆく方針です。そのために本号から「GAP哲学研究講座」を連載し、アダムスキーの宇宙的な哲学とスペース・プログラムの意義について詳細な解説を行なうとともに、「質疑応答」欄を設けてご質問に応じることにしました。ご遠慮なく質問をお寄せ下さい。この欄には質問者の氏名を公表いたしません。

GAP活動は原則として各国コーワーカー（世界GAP機構に参加している各国の代表）の個人活動であって、一般のグループ活動とは意味が異なります。合議制によるグループ活動にすると必ずトラブルが生じるために個人活動としたのはアダムスキーの賢明な配慮にもとづくのであって、しかも各国コーワーカーは多年独力でよくその重責を果たしてきました。「知らせる運動」とは一グループの確立強化を目指すものではなく、信じて協力しようという人が口頭により他人にGAP哲学を伝えるだけでよろしく、必ずしも入会を強制するものではありません。なぜならば、GAP哲学は個人の実践を重視するのであって、団体活動にありがちな集団心理作用による同一化現象を避けることにあるからです。すなわち個人の自由を尊重し「去る者を追わず、来る者をこばまず」の精神に徹しています。ゆえに他人に伝える場合は強制をしないようお願いいたします。GAP哲学研究における不明な点、その他個人的な問題で解決不可能な事柄が生じた場合は遠慮なくご一報下さい。当方責任をもって回答しますとともに、できるだけのご援助をいたします。

日本GAP代表 久保田八郎



久保田八郎記

ジョージ・アダムスキー

# 改訳 空飛ぶ円盤同乗記

## 4章 初めて大気圏外を見る

このとき私と同年ぐらいに見える男が部屋の左隅のドアから親しみのある微笑を浮かべながらはいって来た。その隅に船体の上部デッキに通じると思われるハシゴがあるのに私は以前から気づいていたが、その人がはいって来るまではドアが見えなかったのである。姿を現わした瞬間、二人の婦人は席を辞して操縦室へ通ずる戸口から出て行ったが、まもなく火星人のイルムスが引き返して来た。彼女は美しいガウンを、男たちの着ているのと同じスタイルのパイロット服に着かえている。服の色は明るい茶色で、腰のベルトの上のふちと下のふちが濃褐色である。操縦室へいっしょに行きたいかと尋ねるので、私はよろこんだ。

ファーンコンが仲間に加わって、三人が次のデッキに通ずるハシゴを登ると、母船に到着したときに最初みんながはいった操縦室からちょうどオーソンが出て来るのが目についた。年輩の男と土星人ラミューが休憩室に残った。

上部デッキの通路を歩きながらファーンコンが言った。「このような大母船には多くのパイロットが乗っていますが、四人交替で勤務につきます。男二人と女二人です。カルナとイルムスはこの金星の母船のパイロットです」

私が見た船内のあらゆる部分と同様に、この通路は目に見えない光源から心地よく照明されていて、これは大母船の端にある小さな室まで上り傾斜となって前方へ続いていた。



一同がこの部屋へはいると、一種のチャートの上にかがみこんでいた一人の青年が頭を上げて微笑したが紹介はされなかった。イルムスの同僚パイロットなのだろう。

「この母船をもっとくわしく説明するのにちょうどいいときだ」とファーンコンが言う。「本船は私たちが乗って来たような円盤を十二機運ぶ輸送船です。実際にはこの内部は外観上の大きさから判断されるほど広くはありません。それは壁と壁のあいだに装置してある機械設備が多いためです」

イルムスがつけ加えた。「この特殊な母船は四層の壁でできています。ただし大きさや建造目的によっては、もっと多くの壁があるものもあるし、少ないものもあります」

室内のおびただしい奇妙な機械類をながめながら、壁と壁のあいだにどんな「機械装置」があるのか知りたくてならなかった。「利用できる短時間内にはできるだけくわしく話しましょう」とファーンコンが語り始めた。

「最初にみんなでは行って行った場所の全域が偵察機（円盤）の格納庫になっていますが、その中には修理工場も含まれています。もと建造するときに相当な技術を用いて注意を払っても、やはり部品が破損したり材料が摩滅したりしますので、宇宙旅行をする母船には多くの修理設備が必要になるわけです。

船内に適温を保つ気密装置は壁と壁とのあいだに仕掛けてありますし、その他にも多くの設備がありますが、説明するのに十分な時間がありません。船内のあらゆる部分のさまざまな壁には中へはいるためのドアがついていて、そのために各装置へ容易に接近できます。各船には数名の機械技師が乗っており、交替制で働いて各部を絶えず点検しています。

したがって故障が未発見のままになって大事に至るようなことはほとんどありません」

この操縦室内で私はあらゆる方向に頭をめぐらせて子細に観察することができた。ファーンコンが語り終わると、青年が手を伸ばして一個のボタンに手を触れた。とたんにいままで固い壁だと思っていた壁面に丸窓のような穴（複数）が現われ始めたのである。すると二人のパイロットは室内の反対側の小さな座席に位置を占めた。私は軽い動揺を感じた。どうやら船体の鼻先を上方へ向けたらしい。

これはたぶん彼らの惑星へつれて行くつもりなのではあるまいかと思つて心臓の鼓動が激しくなったが、その望みはむなしかつた。まもなく船体が停止したような気がしたからだ。イルムスが私の方へにっこり笑いかけて言う。「いま地球から約八万キロの地点にいます」

ファーンコンが丸窓の一つへ行くと合図を言った。「宇宙空間が実際にはどんなふうに見えるか知りたいでしょう？」

外を見たときにさっきの失望感はずぐ消えてしまった。宇宙空間の視界が完全に暗黒なのに驚いたのである。しかも船体の周囲いっぱいには発生している現象（複数）があつた。まるで無数のホテルがあらゆる場所をあらゆる方向に飛びまわっているように見えるのだ。しかしこれは多彩な色光を放っていて、宇宙の花火大会ともいふべきすさまじい美観を呈している。

この壮観さに感嘆していると、地球の方をふりかえつてこの距離から私たちの小さな天体がどのように見えるか観察したらどうかとファーンコンがうながした。

私は見た。驚いたことにわれわれの天体は白い光を放っている。月の光によく似ているが、地球で澄んだ夜空に見られる月光のような清純さ

ではない。地球をとりまく白い輝きはかすんでいて、大きさは早朝に地平線上を昇る太陽ぐらいである。地球表面には地球だと断定できる痕跡は何も見えない。ただ下方に大きな光の球のように見えるだけである。ここから見れば、そこに無数の生物がひしめいているとはただだだって想像できないだろう。

この八万キロの高度でパイロットたちは自動操縦装置を作動させていた。イルムスが一同に加わって私に説明した。「各操縦室には自動操縦装置が一台ずつそなえてあります。これらは単独にもいっしょにも作動しますが、船体の進路を完全に制御したり、危険が近づくのを警告したりすることもできます」

男のパイロットは自分の部署にとどまっている。イルムスが説明に注釈を加えた。「各操縦室にはいつも一人はパイロットが働いていなければならぬのです」

もっと近寄って操縦装置を見たらどうかとすすめてくれた。

各座席の片側には床にチェーブのような物があって、パイロットが楽に内部をのぞけるような高さに立っている。イルムスが説明した。「あなたが最初に船内にはいったときのあの大きな操縦室で気づいたかもしれません、これはそこにある望遠鏡に接続しているのです」

しかしこのとき望遠鏡は操作されていなかった。これは母船が実際に惑星間を飛んでいるときか、または観測や調整の目的で停止しているときだけに使用されるのだろうかと思った。

室内のこの部分の床全体が偵察機の床の場合と同様に拡大レンズになっている。しかしこのときにかぎっての船体の角度では、ひざまずかなくてはそれをのぞけないだろう。

外で発生していることをすべて見ようとして目を緊張させたとき、宇

宙とその活動に私は仰天した。例のホタル現象以外に、燦然と輝く無数の巨大な光体が空間を通過するのが見えるのだ。私にわかったかぎりではこの光体群は燃えているのではなく、ただ光っているだけである。特に或る一個が三種の異なる色——赤、紫、青色を放っているようだ。他の宇宙船なのかと尋ねてみた。

「いいえ」とイルムスが微笑して言ったが、それ以上は説明しなかった。また、ときどき宇宙空間よりも黒い、いろいろの大きさの黒い物体が通過するのを認めた。しかしこの動く物体のどれも母船に衝突はしないようである。ときどきこの黒い物体すらも部分的に光ることもある。話によると、これはわれわれが流星といっているもので、地球の大気中を通過するときに摩擦を生じ、そのときだけ地上から望見されるのである。見たところこれらの物体は母船の方に直進しているのに、なぜ衝突しないのかと尋ねてみた。

ファーコンが説明した。「母船自体が自然の力——“電磁気”とあなたがたは言うでしょうが——を利用して行っているのです。しかも船体はいつも過剰なパワーを持っていて、このパワーには外壁をつらぬいて空間のある距離まで放射されるものもありますが、なかには少ししか放射されないものもあります。しかしときにはこの影響が外部の数マイルにまで及ぶ場合もあります。これが微小物体すなわちあなたがたの言うイン石をも排除する防壁として作用し、絶えず放射されるこのパワーによってイン石類をよせつけないわけです」

彼は説明を続けた。宇宙空間のあらゆる天体は空間に対して陰極になっており、いわば電磁力の海の中を泳いでいるようなものである。したがって陰極の放射線は陰極の天体すべてに反発し、同時に船体の摩擦熱の発生を防ぐのだという。

私はこの美しい光景を楽しみながらいつときたはずんでいたが、まもなくパイロットたちがもとの席へついたので、われわれは最初に乗船したときに母船が停止していた六万四千キロの位置に帰った。

船体が動くときにそれとわかるほどの急降下やターンなどは感じられなかった。母船の動きはあまりに静かなので、ほとんど気づかないほどである。聞こえてくる音は回転中の扇風機を思わせるかすかな音響だけだ。

呼吸やバランスを保つための特殊なヘルメットその他の装置をつけている者はいないが、私はあらゆる事にずっと気をくばっていた。

非常に感心したのは、船内でこれまでに見たあらゆる設備が押しボタンの操作されるらしいことである。しかも破壊用の武器らしい物はどこにも全然見あたらない。しかし母船から放射される放射線でコントロールされる自然の反発力を宇宙空間で見たあとなので、必要とあればこの放射線の力は自衛用としてきわめて有効に応用されるだろうという強い感じが起こってきた。

この考えにファーコンが答えて言った。「そう、そのとおりです。だがまだその必要が起こった例はありません。その上、もしその問題が単に私たちの兄弟と——好戦的な地球人でさえも——彼我の生命の対抗というだけのことならば、私たちは兄弟を殺すよりも自分たちが殺される方を選びます」

含蓄あるこのさりげない言葉に私は深く感動した。そして地球の同胞の、分裂した民族のはなはだしく異なる考え方を悲しく思わないわけにはゆかなかった。各国はいまも多くの恐るべき破壊用武器の生産競争に没頭している。それは世界中の増加してやまない多数の同胞に死、苦難、病氣などをもたらすだろう。殺人の準備をするための必要な一部分とし

て青年の心に吹き込まれている「敵」に対する憎悪の信条について考えてみた。というのは、殺したいという欲求は創造物のなかの自分の位置を少しでも理解している自然人の天性ではないからだ。また、愛そのものである万物の「永遠の父」にささげられる祈りを、名状しがたいほど冒瀆していることも考えてみた。しかもこのようにして天性の人間性そのものを裏切りながら自分たちを祝福してくれと「父」に頼んでいるのだ。

こうした思いが私の心を流れていたあいだ、イルムスとファーコンの二人は沈黙していた。こんなことはいままで何度も考えたけれども、このときほど痛烈に私の意識に浸透したことはない。これはいつまでも私の胸から消え去らないだろうと思う。

まもなくファーコンが呼びかけたので、普通の家庭用ラジオほどの装置に目が引かれた。スクリーンはテレビとそっくりである。彼が説明した。あらゆる旋律は一定の音階で組み立てられるが、それと同様にあらゆる言葉は音楽の音階に似ている。この法則を知ることによって、これまで未知であった言語を短時間で知ることができるというのだ。未発見の振動が現われたときは画像に変えられて、この未知の言語または振動が何を意味するかを正確に示すのである。いうまでもなく、彼が見せてくれたテープは地球で見たいかなるテープとも違っていった。

これはまったくはめ絵のような話なので、私の顔には当惑の色が浮かんだにちがいない。とにかくイルムスは楽しそうに笑って尋ねた。

「大昔地球に住んでいた人々は音響と振動に関する宇宙的な法則を完全に理解して応用していたと申し上げれば、びっくりなさるかしら？」

その真実性を長いあいだ考えていたのだと私は述べた。

イルムスが続ける。「この知識は地球の現代の文明ではすっかり失わ

れていますが、あちこちの少数の人がその可能性についてほんの少し考  
え始めています。他の惑星（複数）ではこの振動の法則が教育システム  
の基本的な考えになっていきます。これを基礎として生徒たちは知識と表  
現のあらゆる分野で急速に学ぶことができるのです」

このときファーンが言った。「さあ、休憩室へひきかえさねばなり  
ません」イルムスを先に行かせようとしてあとずさりしながら、この  
巨大な母船が一万二千メートルから八万キロまで上昇したときに、船内  
に動揺が全然感じられなかったのはなぜかと尋ねてみた。

「まったく簡単なことですよ。船体が非常に精密に作られているからで  
す」とファーンが答えて、更につけ加えた。「地球の潜水艦がそうい  
うふうで作られているのと同じです」

この人々が地球人や地球上の発達状態に精通しているのを知って、私  
はまたもや驚いてしまった。

彼は続ける。「地球の潜水艦は水面下へかなり深く沈みますが、乗組  
員は艦の装置によって記録される動きをほとんど感じないでしょう。艦  
は注意深く設計してありますから乗組員はまったく快適です。水中を航  
行する船と宇宙を飛ぶ船とのあいだに実際にはさほどの相違はありませ  
ん。ただ違うのは私たちの宇宙船は、自然の“力”で推進するのですが、  
潜水艦は人工的な力に頼っている点です」

相手の言う相違は大変なもののように思われたが、私はだまっていた。  
ファーンが続ける。「もし地球人が宇宙のいたる所に存在する自然の  
エネルギー源の利用法を知れば、私たちの宇宙船みたいに海面から飛び  
上がって大気圏を通過してそのまま宇宙空間へ舞い上がれるような潜水  
艦を作ることができるようになりますよ」

このことで私は一九五一年の始め頃に報導された二つの事件を思い出

した。まず一つは、韓国の西海岸の沖合、仁川湾の海中に、雲一つない  
青空から二個の“ミサイル”が落下したのである。そのミサイルは碇泊  
中の水上機母艦ガーディナーズ・ベイ号の近くに落ちて、約三十メー  
ルの高さの水柱を巻き起こしたが、そのあと“ミサイル”はふたたび海  
中から飛び出て上昇し、やがて視界から消えたと報導された。別な事件  
はスコットランドの沿岸沖で発生したもので、これもほぼ同じ内容であ  
る。

ファーンは私の心を読み取ったとみえて次のように言った。「あな  
たがこの種の宇宙船を撮影した写真に“潜水艦型”と名づけたのはまっ  
たく正しかったわけです」

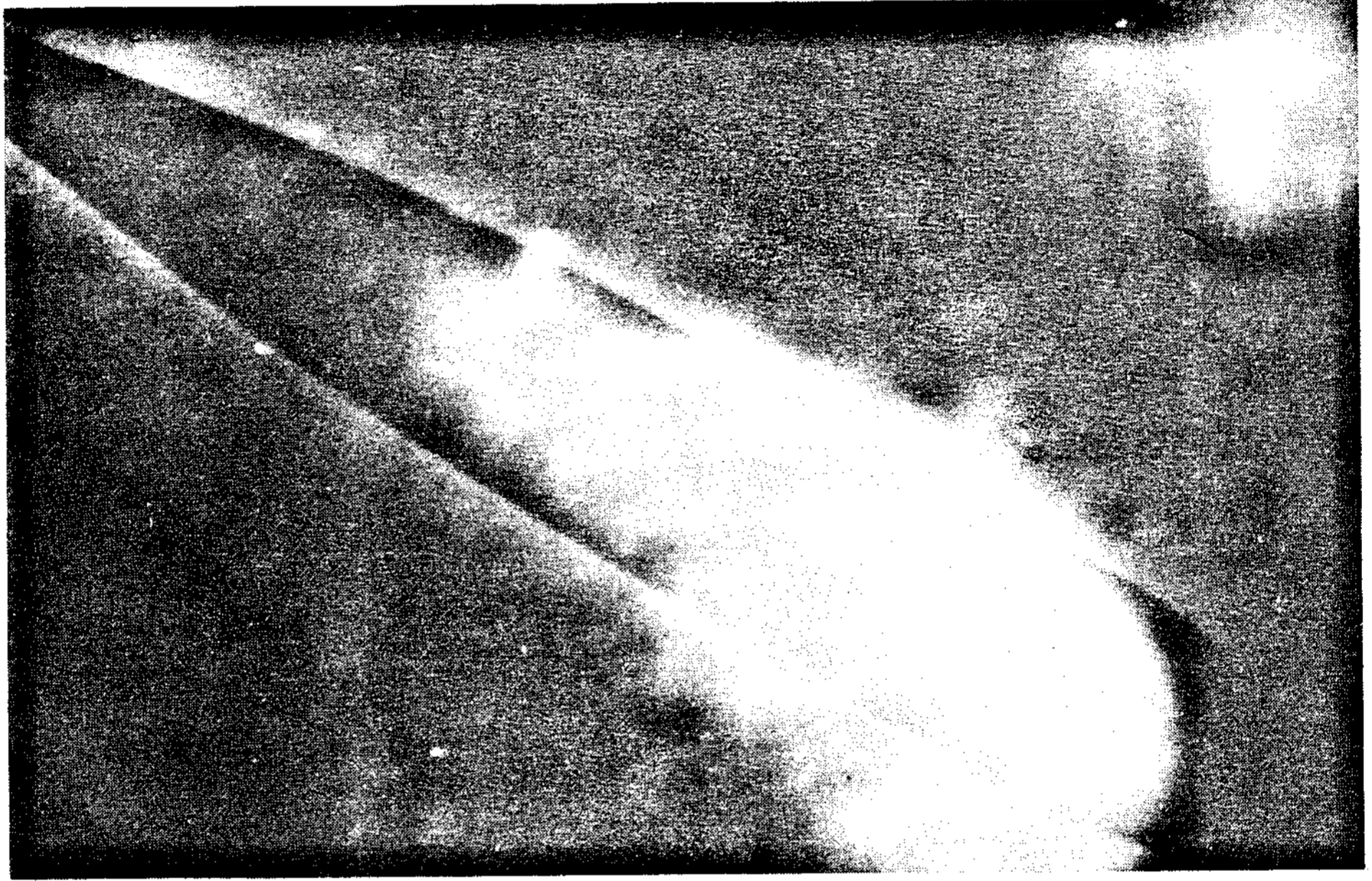
このとき私たちはラミューと年輩の人とを残したまま出て行ったあの  
大きな休憩室へはいった。二人はまだそこにおいて彼らの言葉で語り合っ  
ている。近寄って行くと二人は立ち上がって、多くのイスにかこまれた  
小型テーブルの方へ歩みより、私たちにも仲間に加われと手招きした。

これらのイスは食堂用か事務所用みたいだが、はるかにすわり心地が  
よい。一同が着席するとカルナとオーソンもグループに加わった。

テーブルの上には澄んだ液体のはいったゴブレット（台つきグラス）  
がならべてあり、その液体はきわめてスカッとするものであることがわ  
かった。なんとも言いようのないような微妙な甘さをもつ味である。ね  
ばり気があって、すすらねば飲めないような種類のものだ。このジュ  
ースが抽出される果実の名を知らされたが、地球でこの味に比較できるも  
のは思いつかない。

地球を出発してから現在までに経過した時間はかれこれ一時間ほどで  
ある。しかしこの束の間に地球での六十一年の生涯中に得られなかった  
宇宙のより偉大な概念にむかって私の全生命と理解力が開いたのである。

## アダムスキー撮影の潜水型母船



さて一同がテーブルのまわりにすわると、全員の目は年輩の宇宙人の方へ向けられた。彼が語り始めたのだ。あらゆる惑星にはこの宇宙人と同じほどに発達した人がいることは後に説明されたけれども、偉大な進化をとげた人の面前に私がいることに気づかないわけにはゆかなかった。そして私ばかりでなく同席者全員の態度も、みんながその人の前できわめて謙虚な気持になっていることをあらわしていた。この人の現在の肉体の年齢が一千年近いことを私は知ったのである。

続く一時間ばかりのあいだその人は話したが、それは一分間ほどにしかな思えなかった。全員は細心の注意を払って聞き、偉大な英知を持つこの人にむかってただだまっただけだった。

### 5章 指導者との会見

「友達よ」と偉大な指導者は言った。「あなたはここへ案内されて私たちの小型機やこの大母船の内部にある物を見ました。小型機にしても母船にしても乗ったのは短距離にすぎませんが、地球の同胞に伝えるための豊富な知識を与えるには十分な乗船です。また大気圏外がどのようなものかとか、それがまったく絶えまない活動をしていて、結局は万物を生み出す活動分子で満ちていることなどを知りました。そこには始めも終わりもありません。

広大な宇宙には地球人が惑星と呼ぶ無数の天体があります。これらは万物がそうであるように形が異なりますが、私たちの惑星や地球に非常によく似ています。しかも惑星のほとんどには人間が住んで、あなたが

たや私たちと同様な人間によって支配されています。私たちと同じような人間を維持できるほどに発達した惑星もあれば、生長においてそれほどの発達段階に達していないものもあります。あなたが知らねばならないのは、各世界は「形態」にすぎず、それらの世界も最小の物から最大の物に至るまで万物が体験する長い生長の期間を経ているということです。

各惑星は中心の太陽の周囲を他の多くの惑星と完全なタイミングを保ちながら同等に運行し、一単位またはいわゆる太陽系を構成しています。私たちが宇宙旅行によって学び得たかぎりでは、どの場合でも一太陽系には十二個の惑星があります。それ以上になると十二個のこのような太陽系が太陽に相当する中核の周囲に結合されていて、これらの太陽系が地球の科学者の言う「島宇宙」を形成しているのです。更にこのような十二個の島宇宙が多くの館を持つ「父」の住み家の中で広大な一単位を形成する・・・というわけで、結局は無限です。

私の惑星や私たちの太陽系内の他の惑星（複数）では、あなたがたが「人間」と呼ぶ創造物は、各種の発達段階を通じて、地球人の想像もつかないほどに知的に社会的に発達し、進歩しています。この発達は、あなたなら自然の法則と名づけるかもしれないものを固く守ることによってのみ達成されたのです。私たちの世界（地球以外の各惑星）では、それは時間と空間のすべてを支配する「至上なる英知」の諸法則に従うことによる成長として知られています。

あなたもごらんになったように、私たちはあなたがたが部屋を横切るのと同じように容易に宇宙空間を航行できます。宇宙旅行は、惑星や人間ばかりでなくあらゆる天体を生かして活動させている諸法則をマスターした人にとっては困難ではありません。そうになると、宇宙のこのような二個の天体間の距離すなわち各世界間の距離は、地球で距離について

考えられるようなものとはまったく異なることがわかります。

かつて地球の大陸間の距離は大変なものと考えられ、両方を横断するのに長年月を要したことを思い出してごらん下さい。いまは航空機が過去の時代に必要とした時間を比例した短時間にちぢめています。しかし距離に変わりはありません。あなたがたが自分の知識をのばして無限の空間で作用している諸法則を知るならば、そのようになるでしょう。

あなたがた地球人がまだ知っていない別な事実がありますが、それはどんな人間の肉体でもこの惑星でも適応して生きられるということです。惑星の大きさや年齢によっては大気の状態に多少の相違はありますが、地球の海面と数千フィートもある山上間で経験する相違と大差はありません。なかにはこの変化で影響を受ける人もありますが、やがてはみな順応するようになるのです」

漫画から専門家と目される人々のまじめな論説に至るまでよく描かれる重いヘルメット、付属するパイプ、携帯袋などに関する一般の概念を思い出しながら、われわれの世界（地球）こそ宇宙を通じて最も未発達なのではなからうかと考えてみた。

私の想念を読みとって休むことなく話し続けながら、この偉大な指導者は言った。「そんなことはありません。地球はこの太陽系では最低の発達状態にあります。他の太陽系の惑星（複数）にはその住民が社会的にも科学的にも地球の水準に達していないのがありますし、また科学の分野ではすばらしい進歩をとげて、宇宙旅行などをやっています。また人も、人間や社会的な理解の面では低いままにある惑星もあります。

私たちの太陽系の地球を除く全惑星の住民は自由に宇宙を旅行しています。近距離だけを行なう人もあるし、非常な遠距離の旅行に出かけて別な太陽系群に到達する人もあるのです。

生命と宇宙に関する地球人の理解力は実に貧弱なものです。その結果他の世界や宇宙の構成について多くの誤った考え方を持っているわけです。それどころか人間自身についてもほとんど知識はないのです！だがより大きな理解をまじめに求めようとする欲求が地球の各地で増大しているのも事実です。したがって地球人が現在歩んでいる道をすでに通ってしまった私たちは、よろこんで援助の手をさしのべて、受け入れようとする人のすべてに私たちの知識を伝えようとしているのです。

まず地球人が理解しなければならぬのは、他の惑星群の住民は根本的には地球人と変わらないという事実です。他の世界の生命の目的は基本的に地球人のそれと同じです。あらゆる人類の天性として——たといその天性がどんなに深く埋もれていようとも——高遠なものにたいして昇華しようというあこがれがあります。地球の学校制度はある意味で宇宙の生命の進化の過程にならっています。というのは、地球の学校では学年から学年へ学校から学校へと進み、より高度な充実した教育を受けてゆきます。同様に、人間も惑星から惑星へ、太陽系から太陽系へ進んで、宇宙的な生長と奉仕について次第に高度な理解と発達を上げてゆくからです」

指導者がこのような説明をしたとき、地球人も用意ができたときには高い発達を上げた惑星に進歩してゆくことを意味するのがわかった。この地球上に住みながらいつの日かわれわれも宇宙を支配する諸法則を学んで、彼らがやっているように他の世界を訪問することができるようになるだろうか。

私の心中の質問にたいして指導者はべつだん答えないうで続けた。「地球人はいわゆる『時間』に束縛されているのです。しかしあなたがたの

時間の概念に従ってさえも、宇宙旅行を達成したときは他の惑星へ到達できるその速さに驚かれるでしょう。

この冒険にたいして地球人は新語を作る必要があるでしょう。あなたがたは私たちの宇宙船を——地球人は空飛ぶ円盤と呼んでいます——飛ぶと言っていますけれども、この「飛ぶ」という言葉は地球の飛行機の作動にふさわしいものです。私たちは地球人が言っているように「飛ぶ」ではありません。機械的な方法によって引力を無効にしてしまうのです。あなたがたはそれを「無重力」と表現しています。こうして私たちは引力の干渉や抵抗から妨げられないのです。だから私たちの宇宙船は進行方向に急角度で方向転換したり、地球の飛行家や科学者たちを不思議がらせるようなスピードで動いたりできるわけです。

私たちは引力の制御法や、惑星からの安全な離陸と到着に必要な知識について多くを伝えてあげることができるようでしょう。また、私たちに大いに役立ったこの知識をよろこんであなたに伝えることもできます。しかし地球人は私たちが他の惑星で持っているような万人の幸福を求めて互いに平和と兄弟愛でもって生きることを学んでいません。もし私たちがこの力を（推進力を）あなたやその他の地球人に洩らして、それが一般の知識になったならば、地球人のなかには宇宙旅行用の船をすぐに建造し、銃砲を積みこんで、征服の意図をもって撃ちまくり、他の世界を占有する者もあるでしょう。

地球のあるグループが軍事基地として使用するために月の財産権と所有権をすでに主張していることをご存知でしょう。地球の多数の科学者は遠からぬ未来に惑星間航行用として私たちの宇宙船と同様な宇宙船の建造に成功するだろうと考えています。この実現はまったく可能ですが、

地球人は今日の地球で見出されるような利己的な個人生活よりも、他の世界の人々によって生かされている全包的生活をとり入れることを学ぶまでは、大勢で来たり滞在したりすることは許されないう。地球人には大気圏外について学ぶべきことが沢山あります。あなたがたが空間を動くのは宇宙自体に乗ることであるからです」

私は宇宙を、活動してやまない大海にたとえながら、よく用いたたとえを思い出した。そして地球の海洋定期船が海の波に乗って、またはそれを突き抜けて進行するように、この惑星間宇宙船も宇宙の活動の波に乗って進行するのだと思った。

「そうです」と指導者が答えて「まったくそんなものです。だから地球の科学者もこの原理にもとづいて研究すれば多くの理解が得られるでしょう。というのは、自然自体はオープンマインドをもって探求する人のすべてにその秘密を洩らすからです。

すでにお聞きになったように、私たちは学ぶために宇宙を旅行します。私たちの宇宙船内には多くの機械装置があつて、そのなかにはあなたが見たのものもあるし、まだ見ていないのも沢山あります。地球では私たちの宇宙船のすべてを「円盤」と呼んでいます。多くの目的のために多種類のさまざまな型のものがあるのです。最大の宇宙船は絶対に地球の大気圏内には入りません。実際には、それらは地球から数百万マイル以内には決してはいらないのです。この巨大な宇宙船で旅行する数千の人々を危険にさらすことはできないのです。というのは、もし地球で未発達な地球人の眼前に着陸しなければならぬような事態が発生した場合、私たちの同胞が危うくなるからです。

友よ、この頃私たちが地球へやって来るおもな目的は、今日の地球人をおびやかしている重大な危機について警告することなのです。地球人

のなかのいかなる人が気づくより以上に多くの事を私たちは知っていますから、できるならば地球人を啓蒙することがわれわれの義務であると思つてゐるのです。あなたやその他の人を通じて、私たちが伝えたいと思つてゐる知識を地球人は受け入れることができますし、反対に彼らは耳をふさいで自分自身を破壊することもできますが、その選択は地球人側にあるのであつて、私たちは命令することはできません。

あなたが私たちの兄弟と地球で初めて会つたときに、彼は地球の原爆の爆発が私たちの関心の的になつてゐるのだと述べましたね（注一 一九五二年十一月二十日のデザートセンターにおける会見時の話を意味する）。問題はそれなのです。テスト爆発のエネルギーや放射能が地球の大気圏外にまだ出ていないにしても、この放射能は地球人の生命を危険にしています。やがて分解が始まり、そのため科学者や軍人が「爆弾」と言つてゐる物の中に閉じ込めてゐる致命的な元素でもって大気を満たすでしょう。

この爆弾から放たれる放射能はやつと地球からこのあたりまで達しようとしてゐるところです。空気より軽くて空間自体より重いからです。しかし地球の人類が大戦争で互いにこのエネルギーを使用するならば、地球の人口の大部分は絶滅し、土地は不毛となり、水は汚染され、長年月のあいだ生命は生存できなくなるでしょう。銀河系中の地球のバランスを失うほどに地球自体のボディが破碎される可能性もあります。

これらは直接地球に関する影響ですが、私たちにとつては宇宙旅行が長いあいだ困難かつ危険になるでしょう。なぜならその場合こんな多数の爆発で放射される放射能が地球の大気をつらぬいて大気圏外に出てくるからです」

もし実際に戦争が発生した場合、彼らはどの程度に地球人を阻止する



ことを正当と感じているのだろうかと考えてみた。

指導者は私の心中の質問に答えて言った。「ご存知のように、地球の兄弟がやっとう用いることをおぼえた爆弾よりもはるかに強力なエネルギーを用いてコントロールする知識を持つ私たちは、望んだとすれば私たちの強力なエネルギーで地球人のエネルギーを無力にすることもできるでしょう。だがいままでに話したことを思い出してごらん下さい。私たちはたとい自衛のためでも宇宙の兄弟を殺しません。地球人の行動の意義を彼らに知らせることによって、このような戦争を防止しようと努力していますし、今後もその努力を続けるつもりです。人間は無知のゆえに戦争を起こすからです」

一条の光線が相手の顔を照らし、その目は内部にひそむある美しい幻影を見つめているようである。その人は静かに話し続けた。「およそ人間でいわゆる“ユートピア”すなわちほぼ完全な世界をかつて夢想しなかつた者はありません。人間が想像するものはどこかに実在するのです。したがってあらゆる物事が達成される可能性を帯びています。地球人にとってこれは可能なのです。銀河系の他の惑星にいる私たちにとってもいまそなうのです。地球人のなかに次のように叫んだ人々がいます。『万事に達成の可能性があるとすれば、ずいぶんおもしろくない完成だろうな！』と。そんなことはない、友よ、万事に段階があるように完成にも段階があるのです。私たちの世界ではみな幸福ですが、停滞する者はいません。丘の頂上に登ると下から見るときと違って更に別な丘が見えてくると同様、常に進歩というものがあるのです。次の高さにまで登る前に、あいだにある谷を横切らねばなりません。

宇宙の法則にたいする理解力は向上もするし停滞することもありません。現在の私たちもそうですが、地球でもそうでしょう。知識によって向上

しながら、この同じ原理によって地球人は同胞に暴力で対抗することはできなくなるでしょう。あらゆる人間の中にひそむ信念や天性が—それが自分の生活を支配し、自分自身の運命を形成するという聖なる特権を人間が持っている—と本人に感じさせるのですが—たとい試行錯誤の道であるにしても、あらゆる集団、国家、民族に等しくあてはまるのです。進歩からはずれる多くの下り道があるのと同様に、上方へ通ずる道もあります。一人は前者を選び、他の人は後者をとるかもしれませんが、これは兄弟たる二人を分離させるものではありません。たしかに人間は望むならば他人から多くを学べるでしょう。無限の創造という広大さのなかでは、これしかないという一本の道だけがあるのではないからです。地球で私たちは“幸福への道”という言葉は何度も聞きましたが、これはよい言葉です。進歩とは幸福なのであって、その始まりから上方への道にずっと敷かれているからです。そして幸福は人々を、他人の努力が自分の努力とは異なる性質のものであるにしても、その他人の努力にたいして寛容の心を持つ兄弟にするのです。

地球や地球人に悪いものは何もありません。ただし理解力の欠乏のために“唯一の最高者”の宇宙的な生命界において彼らは幼児です。すでにお聞きになったように、私たちの世界では創造主の法則を“実行”しているのですが、一方まだ地球ではその法則について語っているだけです。いまあなたが知っている教訓だけでも“実行”するならば、地球人は出かけて行って互いに殺し合うようなことはしないでしょ。そうすれば彼らは自分が生まれてそれゆえに“故郷”と呼んでいる場所で、善と幸福とを達成するために自分自身の内部で、自分の集団内で、自分の国内で働くようになるでしょう。

地球人は地球全体にいかにも早く変化が起こり得るかを知らなければ驚く

ろうと思います。あなたがたは世界中に放送の媒体を持っているのですから、疑惑や非難のかわりに万人にたいする愛と寛容をうながすメッセージを流すならば、受容的な人が出てくるかもしれない。地球人の大部分は闘争とその後に残る悲哀でいやになっているからです。彼らは自分たちを救ってくれる生き方の知識をかつてないほどに渴望していることを私たちは知っています。また彼らは第三次大戦の種子を残すのに役立つたにすぎない二つの大戦の結果を見たり、ひどい思いをしたりしたために、彼らの心中に恐怖と混乱があることも知っています。

そこで地球上のあらゆる所にいる受容的な人々とともに活動するならば遅すぎることはありません。しかし、友よ、これは急ぐのです。あなたの使命に「無限なる父」の祝福をこめて前進なさい。そしてこの希望のメッセージを伝えている他の人々（他のコンタクティーたち）の声にあなたの声を合流させなさい」（第五章終り。以下次号）

＊

＊

△翻訳閑話▽「空飛ぶ円盤同乗記」という題名は私の骨の骨のシンにまでくい込んでいて、私とは同乗記であり同乗記とは私なのだど内部の何かがつぶやく声を耳にしながら二十年近くが過ぎ去ってしまった。この書なくして私の存在の意義はあり得ない。これを翻訳して世にひろめるために私はこの世へ出てきた人間だったのではないかという気がする。

初めて訳にとりかかったのは昭和三十年の十二月である。当時田舎高校の英語教員というものの全く実力のなかった私は翻訳にずいぶん難渋した。勤務のかたわら約三カ月かかって一応脱稿し、ただちに高文社へ送ったが、すぐにはゲラにならない。なかばあきらめていたら、同年の十二月にやっとゲラが来て初校にかかった。しかし自信がない。とこ

ろが実に幸運だったのは、すばらしく語学の達人な親友の増野一郎氏が病を得て日本橋白木屋を休職して帰郷し、日赤病院へ入院されたことである。渡りに船とばかり早速ゲラを見せてあれこれと教示をいただいたが、これは偶然な援助ではなかったと思う。その後「テレパシー」を訳すことになった。これがひどくむづかしい。するとまた奇跡が生じた。外人の姿などめったに見られない島根県の片田舎へアメリカ人牧師が家族ぐるみで赴任してきて住みついたのである。天の助けとばかり私は原書をかかえて先生の家へかよった。意味のよくわからなかったセンスマインド、ソウルマインド等のアダムスキー独特の造語を明せきなアメリカ英語で詳細に説明して下さったのが、このロバート・カニングハム先生である。おかげで「テレパシー」は成功した。

増野氏もカニングハム先生も実に立派な方で、私は大きな影響を受けたが、なかんずくアダムスキー関係の訳業を助けるために私の郷里へ来られて仕事が一段落するまで七、八年間をどうしようもない日本の田舎ですごされたとしか思えないこの先生の出現は、まことに不思議であった。教会の広いホールの中で先生とただ二人で対座してアダムスキーの原文の講釈を聞いたときの先生の高貴な風ぼうが今もあざやかに浮かびあがってくる。クリスチャンになれとは一言も言わず、語学の問題だけを語り、おそろしくていいいで、驚くほどに親切であったこの先生は私よりも若かったが、偉人であった。

考えてみると私のささやかな力はすべてこうした方々のご援助が土台となって固められている。私の語学はまだ幼稚なものだが、少なくとも何かを学びとったと思う。語学以外の「何か」である。その「何か」とは何か？ よくはわからないが、自分よりもすぐれた人々から与えられる「何か」である。（記者）

# 声

本当に毎日暑い日が  
続いておりませんが、先  
生いかがお過ごしでし  
ょうか。もちろん僕は  
元気でやっております。  
御手紙ありがとうございます。

先日、全く知らない人が二人、僕の家に  
やって来ました。円盤に興味があるそうで  
した。僕はうれしく感じました。彼等は高  
校一年生の人たちでしたが、約二時間程度  
話したと思います。アダムスキーから得た  
知識も幾分話してあげました。彼等は非常  
に驚いておりました。もちろんこのこと（  
事実）を初めて聞き、知ったなら、驚き、  
ある程度疑惑が生じるのは当然なことだと  
思われるわけですが、僕は少し誤ちをやっ  
たような気もするのですが、自分がまだ理  
解もできていないことを、そんな貴重、重大  
な立場をひきうけ、彼等に話したことに、  
なにか彼等に悪いような気がするのです。  
こういう場合、先生はどのような態度を取  
れば良いとお考えでしょう。現在の彼等  
のことを見るべきだと言われるかもしれま  
せんが、彼等は今もより研究心を燃やして  
いるようです。実にうれしいことであり、  
本当にしあわせだと感じておりますが、す  
ぐ「もしも」のことを考えてしまつて、彼  
等が宇宙の意識に目ざめなかつたなら——  
その原因はこの僕がもっとよく理解したう  
えで、彼等に適切なことを言えなかつたこ  
ろにあると考えられるのですが——。こ  
れは少し考えすぎのようですね。

この前日本GAP大阪支部から案内をい

ただきました。今年は出席できることを喜  
んでいるしだいですが。僕の友達の近藤君と  
二人で出席させていただきます。

僕はまだ理解はできていませんが、しか  
しこの宇宙を貫く法則の存在を知り、そし  
て人間本来の姿にもどうしようと努力すること  
ができることは非常にしあわせなことだと  
感じているしだいですが。よくまあこの無限  
の思想の中からこの存在を見つけることが  
できたと思われたいです。

GAPの会誌読ませてもらいました。  
実にすばらしく、知識そのもののように思  
われます。僕にも幾分心のゆとりというも  
のが持てるようになりました。でもへたを  
するとすぐ心の快へと進む傾向があります。  
先生、より御活動を続けて下さい。心か  
ら祈ります。僕もがんばらしていただきま  
す。（香川県 学生・武田雄児）

残暑御見舞申し上げます。先生にはいよ  
いよご健勝のこととお慶び申し上げます。  
尊きお仕事をお進め頂き、また後輩をお指  
導賜り誠に感謝の言葉もあります。小生  
もいろいろな事情から分相応並の御協力？  
もできず申訳なく存じて居ります。とまれ  
先生の御期待に副うような自分になりたい  
と努力しております。（東京 中学教頭・  
羽鳥雅己）

ぼくは高校生ですが、空飛ぶ円盤に興味  
をもって以来、円盤の研究を続けています。  
ぼくがそもそも円盤問題に関心を持ったの  
は、実際に母船と思われる葉巻型円盤を  
見てからです。これは銀白色に輝く葉巻き

型で、ひじょうにゆっくりと飛んでおり、  
不思議なことに後部からもくもくと灰色の  
長い煙をはき出してました。見た当時は  
それが何だかわかりませんでした。見た当時は  
1で撮られた円盤の写真にまったく同じの  
が写っていたので、あとになってそれが円  
盤だとわかったのです。それ以来空飛ぶ円  
盤に関する本を徹底的に読みあさり、ア  
ムスキーの著書もすべて読みました。今は  
もっぱら円盤熱から宇宙哲学の実践につ  
めていきます。

「生命の科学」などははじめのころ、小  
説を読むようにさっと読んでしまつて、あ  
とで何が書いてあったかさっぱりわからな  
くなってしまったものですが、今では三十  
分間ずつ毎日少しずつ読むようにし、何度  
も暗記するまで、つまりキリスト教徒とい  
えば聖書のつもりで読んでいこうと思つて  
います。もちろん読むだけでは何にもなら  
ないので、数取り器による想念観察も始め  
ました。始めはあてにしていなかったの  
ですが、近頃では急に精神が高揚したよう  
な気がします。

今年の八月に旅行した時、その家で飼  
っていたネコの姿を中心に思い浮かべ、目  
をつぶって「ネコよ、私のそばにきなさい」  
と念じていて目をあけると、そばにそのネ  
コがいたのは本当にびっくりしました。  
また学校ではテレビシーの色を伝達する  
実験も友達とやっています。主にぼくが送  
信し、友達に当ててもらおうのですが、色は  
三色ときめ、黄色はバナナを中心に思い浮  
かべ、青は空または海、赤はリンゴとい  
た工合です。人によってさまざまですが、

確率が八十パーセントになったときもあり  
ました。

ところで日本GAPのニューズレターの  
内容は非常に充実していると思います。ほ  
かの円盤研究機関は主に空飛ぶ円盤の出現  
の報導にとどまっているのに対し、日本G  
APは宇宙哲学についても研究しているか  
らです。ところでぼくとしては空飛ぶ円盤  
の推進方法に関する記事も載せてほしいと  
思うのです。空飛ぶ円盤の持つ驚異的なス  
ピードと飛行方法は未来の地球の推進機関  
になる可能性が、よく、ロケットにかわる  
推進機関として研究の価値があるのではな  
いでしょうか。それではご活躍を期待して  
おります。（東京 学生・御橋直人）

私は東京都内私立芝学園高等学校に在学  
中の学生です。GAPに入会してから数多  
くの事を学んで来ました。実際にGAP  
月例会に出席する機会にめぐまれません。総会  
に出席するのがやっとなあります。という  
のも私はバドミントンクラブの主将であり、  
後輩を教える立場にあるので、どうも毎月  
第一日曜日という日は練習日にあたるのが  
多いためです。また昨年の文化祭にも当時  
中学三年の私は、事実上一人でUFOの研  
究発表をしました。資料不足や人手不足も  
あり、あまり反響はなかつたようですが、  
私は発表出来た事だけでも大変うれしかっ  
たのです。そして今年も九月九日十日の文  
化祭にあるグループ参加者の部屋を少々わ  
けてもらい、研究発表を小さいながら開  
こうと準備を進めていた日、私の所へ来たG  
APニューズレターに、東洋英和女学院で

六人もの私と同年の女の子が、盛んな研究発表を行なっているというのを知り、私の学園とすぐ近くにある学校でこんなにUFO研究が盛んなのだと、自分が今までやって来たことがあまりに小さい事だと思われ、とても心悲しい思いでした。機会があれば彼女たちと交換をもちたいと思います。

(川崎市 学生・野川雅行)

久しぶりでペンを取ります。近ごろ私自身に多少の変化が起きてきましたので、それについてご報告いたします。

六月四日午後七時半に初めて宇宙の意識を体験。机にむかってボサツとしていたら、「生命の科学」を一時間程読んだ直後でした。急に何かに引き寄せられるような感じがして、次の瞬間には自分が後ろの方へ遠のいたような、別の世界にいるような感じになった。頭はスカッとさえ、身体はひきしまり、驚くほど生々として感じられ気がよい。歓喜の情がわき起こった。この間わずかに十五秒前後であった。この体験の後わかったことだが、頭の中が以前よりもすっきりして、いままで激しかった感情の波が驚くほどおだやかになった。

七月二十六日、朝遅くまで寝ていてうつらうつらしていたときに宇宙の意識と同調したらしい。これも十一二十秒くらいのものである。特に目立った変化はなかったが、以前よりもなお一層感情の乱れが少なくなった。

八月十日、四日から今日に至るまで時折頭の中で音がしている。舌を軽く鳴らしたような音がほとんどである。四日の朝すわ

って気持を落ち着かせようとしていたときに初めて音がしているのに気づいた。このときは規則的に(一—二秒おき)二十回前後鳴り、それが数回あったように思う。八日の夜、不規則的にかなり激しく鳴る事が数回あり、それによって頭の左側半分は非常にスキリしてしまった。十日に至って午後四時頃、頭の右側の部分でキーンというような金属音のような音が起り(数秒間)、右側の方も左側程ではないがかなりスキリしてきた。

以上、これまでの手記からまとめてみました。実は私はいつごろからか鼻がつまる事が多くなり不快で困っていました。ところがありがたいことに十三日の朝起きた直後、鼻の奥で妙な音(ブツブツというような)が少しして、左側の鼻づまりがスーッとなくなりました。現在は右側もだいぶよくなってきたようです。

その他私が特に気づいたことは、宇宙意識の体験(ほんの一瞬間ながら)と頭の中の音により、「感じ方」というものがだいぶ変化したということです。以前と比較して驚くほど楽天的になってしまい、一体感などもよりハッキリと感じ得るようになりました。きっと脳の中の想念のパターンが変化したのだらうと思っています。このことにもなっているでしょうか、実は最近家の中がとて明るようになってきたのです。私一人の想念が変化することによって周囲にこれほどの影響を与え得ると思ってもみませんでした。こうなってみると全体の自分の自分に強く責任を感じる次第です。

(足利市 学生・村山祐一)

八月二十日の日本GAP大阪大会で、先生の実にすばらしい講演を聞かせていただきまして誠にうれしく存じます。心に続々と入ってくる新しい情報を維持するのに懸命でした。前からこんな大会に出席したくてたまりませんでした。他の惑星はいざ知らず、この地球上であのような生命の奥義を聞けるとは私たちは幸せものだと思えます。

ところで想念観察がどのようにすご意味を持っていようとは知りませんでした。その魂の目的というのは実は前から知っていたのです。というのも、一体自分は何をしていいのか今だにさっぱり解らないのです。内部からの強烈な衝動が自分をお方向へ導いているのは社会人になってから特に痛切に感じているのですが・・・それが想念観察によって知ることが出来るとは少しも思いませんでした。これは実に重大な事と思ひ、さっそく一年数ヶ月ばかり中止していた想念観察を先生からいただいた手帳で再開いたしました訳です。

日常生活を大切に周囲の人たちとけ込み、その上でこの地球上で最高の知識であるアダムスキー哲学を学んでゆくことの大切さを痛感しております。また大会からグループ学習の重要さを痛感しています。

(広島県 会社員・加藤知行)

幾分しのぎ易い気候となりましたが・・・先日の大阪支部大会に出席させていただきました。本当にすばらしく感じました。また実にたくさんの知識を得ることができたと思っております。特にキリ

ストないレジャカのことにはなるほどなあと思いました。新約聖書がそれほど深い比喩を用いているとは知りませんでした。また残留意識についてはいつもどうもはっきり理解しがたいものとして置いていたのですが、幾分理解できました。先生ならびにたくさん先輩たちに会うことができたことは実にすばらしいことだと感じております。毎年出席させていただきます。ありがとうございます。

この前から思っているのですが、「お守り」というものは多分残留意識を吸収あるいは反射する役目を有しているのではないかと考えているのですが、間違いでしょか。

(香川県 学生・武田雄児)

一利益目的で売られているお守りを身につけていてもまったく無意味です。それよりもアダムスキーの「生命の科学」の中の自分にとって最も気に入った部分を数行清書して携帯している方がよいでしょう。編者

暑中お見舞申し上げます。GAPニューズレターの五十号を有難うございました。

先生のますますの御活躍に広島島の地から声援を送っている者の一人です。松江で二度ばかりUFOを見てから、就職の関係で忙しさにかまけて空を見ることがも少なくなりました。警鐘の如くニューズレターが舞い込みました。先生の御健康をお祈りいたします。(広島県 井上隆夫)

月日は秒一秒刻々と流れて人類の歴史を刻みつけ、実相界においては過去も未来もなく、今のみの永遠の生命が輝くのみ。

さて先日はGAPニューズレター五十号  
お送りくださいまして、ありがたく御礼申  
し上げます。一冊にまとめあげてお送りく  
ださる御奉仕にいつも感謝しております。  
日毎に変わりつつある物質界、現象界におい  
て今何が大切か、「なんじ自身を知れ」と  
いう言葉が今こそ大切な時はないと思いま  
すが、GAPの任務もまた大きな役割を果  
たしていることと存じます。今後たいへん  
な時代にいつも創造主とともにあることを  
御信じなされて、いろいろな面の困難があ  
りまして常にお祈りいたしておりますこと  
を心よりお祈りいたしております。

(福島市 佐藤テル)

先日の月例会はたいへんすばらしいもの  
でした。出席できてたいへん喜んでいま  
さて、これから先日話しました体験を詳細  
にお知らせしようと思いましたが、そのま  
ま書くと支離滅裂となってわけがわからな  
くなりますので、箇条書きにしておきまし  
たので、不明な点はまた問い合わせしてく  
ださって結構です。(以下略)

— あなたの異常な現象は過去世に原因があ  
ります。薬やショック療法はだめで、精神  
的な療法と奉仕的生き方が必要です。編者

久保田先生いかがおすごしでしょうか。  
ニューヨークもすっかり秋の気配で、ウイ  
ークエンドにはセントラル・パークの芝生  
の上でカセットテープのバックを聞きなが  
らメイソウにふけるのがとても楽しみです。  
先日お知らせいただきましたエイドリ  
アさん(注)米國GAPメンバー)は、お

便りしたところ、御返事がしばらくなかっ  
たので、どうしたものかと思っておいた  
ところ、七月にカリフォルニアのヴィスタ  
(注)米國GAP本部所在地)の近くへ移  
られて、私とニューヨークで会うことが出  
来なかったのをとても残念がられたスバラ  
シイお便りを今朝いただきました。同じ日  
にアリスさん(注)アリス・ボマロイ)に  
お願いしていた英文「生命の科学」の第一  
課がとどきました。さすがに日本文に親し  
んでいるせいか、わかりが早いようです。

同じく「テレビジャー」も送っていただいた  
のですが、あらためて日本人の私たちは久  
保田先生を中心にしてとてもためぐま  
れていると思えました。先生もご存知のよ  
うに(これらは)本にはなっておらず(注  
)分冊で出されている)、(日本語版を)  
とても安く手に入れることが出来ますのも  
久保田先生のおかげです。このことは日本  
の皆さんにぜひ伝えたいことです。ニ  
ューヨークにさえこれといってGAPの方  
がないように、日本GAPの活躍はスバ  
ラシイと思えます。どういう縁かこうして  
親しく久保田先生に接することが出来ます  
のは無上のよろこびです。もう総会のこと  
と存じます。くれぐれも御大切に、ますま  
す御活躍のほどを祈ります。それでは皆様  
によりしくお伝え下さいませ。

(ニューヨーク 画家・宮内温夫)

あまりよくないお天気が続きますが、先  
生は毎日快活にご活動のことと思います。  
さて九月四日にUFOSライドを送って  
いただいて大へんありがたうございました。

無事映写が終わりましたのでご返送いたし  
ます。それでは簡単にその時の感想を書い  
ておきます。まず連絡は公的にできず、一  
年生だけにとどまりました。教室はわがク  
ラスの担任の大へん理解ある私の尊敬する  
先生に許可を得て放課後借りました。集ま  
ったのは一年男子二十五人でした。反応は  
残念ながら興味本位であるということがす  
ぐに感じられました。したがって雰囲気  
がそういうふうなので、前おきがあまりでき  
ず、またこれがまづかったようです。しか  
しこれも現在の段階では仕方ないように思  
います。まったく無関心よりよいようです。  
ですからこれから数回くり返して今度は心  
してやりたいと考えています。また、いつ  
かクラスのHRの時間にこれに関連するこ  
とについて発表しなければならぬように  
思っています。というのはクラスの担任の  
先生が私に話させたいらしいのです。先日  
時間があまれば話さなければならなかった  
のですが、時間がなくなったので助かりま  
した。もちろん私にはまだ十分わかっても  
らえるように、またどの程度のことを話せ  
ばよいのかわからないので、まったく自信  
がないのです。第一、資料がありません。  
ニューズレター五十号の東洋英和女学院の  
彼女には頭が上がりません。

(北九州市 学生・田村和生)

先日はGAP月例会に出席して大変充実  
した時間をすごさせてくださいまして、とても  
感謝しております。僕も自分なりに「生命  
の科学」を読んだり想念観察をしておりま  
すが、日に日にア氏哲学の深遠さを感じて

は、日常生活に生かそうと努力しています。  
これからも御指導よろしくお願いたしま  
す。

ところで本日お手紙をお送りするのは、  
誠に勝手なお願いで恐縮です。実は僕の母  
は大変目が悪くて困っています。新聞の字  
を読むにもメガネをかけ、虫メガネを使い  
むことができません。さらに夜になると道  
を歩くことも困難なほど夜盲症の症状がう  
かがえます。とにかく夜家に帰ってくるこ  
と、玄関に電気がついていないのにそれが見  
えないために手さぐりで入ってこなければ  
なりません。さらに大変視野がせまいので  
す。おそらくテレビを見ていてもテレビの  
画面のほんのわずかしきが見ることができな  
いでしょう。町を歩いていてもすぐ横を歩  
いている人が目に入らないために、ぶつか  
って迷惑をかけることは日常茶飯事です。  
話を聞くと子供の頃からかなり悪かったよ  
うです。僕が「生命の科学」をかなりのレ  
ベルまでマスターして母の目を治せるくら  
いならいいのですが、何年先になるかわか  
りません。これを何とか治す方法はないも  
のでしょうか。勝手なお願ひですが、よろ  
しくお願ひいたします。(千葉県 学生・  
足立亘宏)

(千葉県 学生・足立亘宏)

— 目の網膜がやられており、手術を必要と  
しますが、今は体が弱っているので手術は  
無理です。御本人は前生で死ぬときに人か  
ら目をつぶされたため、恐怖心を目が持ち  
越しています。手術をするまでは「生命の  
科学」をしっかり読んであげて下さい。こ  
れだけでもかなりよくなるはずですよ。編者

# 大阪支部大会、盛況

去る八月二十日、尼崎産業郷土会館において昭和四十七年度日本GAP大阪支部大会が開催された。当日は盆あけまだまもなく出席者の数もあやぶまれたが、遠くは九州、中国、東京方面からの参加者もあり、その数は三十余名という盛況ぶりであった。会場には数年前に斎藤雄久氏撮影の一連の円盤写真やニューズレター五十号の表紙写真(拡大)がはられ、市川英一氏作製のアダムスキーのコンタクトに関するパネルも飾られてある。

午前十時、浅井総一氏司会のもとに市川大阪支部代表の挨拶となる。市川氏は御自身の貴重な想念観察の体験談や大阪支部の現況報告などをされ、この大会から皆より多くのなにかを学ばれんことを願い、結びの言葉とされた。

次いで久保田代表の挨拶、講演となる。まずGAP内において多数の人が関心を示しはじめた想念観察について代表より重要な示唆が与えられた。代表は、想念観察は基礎であって、自分の想念パターンを知り、それを変えることにある。最重要なのはその印象観察によって自分の魂のこの世における目的を知ることにあるのだと力説された。代表によると人間にはそれぞれ魂の目的があり、各魂は生まれ変わるときに環境を選ぶ自由がある。だから一般のカルマ説は誤りである。また思念による物事の実現も、何を望んでも実現するというものではなくて、自己の魂の目的に沿った線における物事のみ実現するのだという。

静穏な雰囲気の中、代表は深い問題が代表の口からとうとうと語られてゆく。代表は自分は情報を伝えるパイプの役目をしていて、ただにすぎない、しかももう所々こわれかかったパイプだとユーモアをまじえた巧みな話術で皆をひきつける。

お話は新約聖書のこととなり、これは人変動発生とは肉体内部における変動のことであるという。またイエス時代に約二十人の内の一人がインドを経て日本にきた。インド滞在中にこの人がシャカと呼ばれたそうである。新約聖書時代から約二千年後にまさにアダムスキーは歴史をくり返す役割を演じたのである。

非常に深遠な問題と多くの新しい事実がわれわれにもたらされ、あっというまに午前の部は終了した。

午後になって一天にわかにかきくもり、雷鳴がとどろきはじめる。雨は強く風とともに窓をたたたくが、室内はそれとは対照的におだやかな状態が保たれていた。照明が消され、「想念観察」と題するスライドの上映となる。これは市川大阪支部代表と藤原孝幸両氏の多年にわたる不屈の忍耐力と強固な意志の結晶であり、不滅の輝かしい業績はさん然たる光を放ち続けている。同時に一九七一年十一月十四日にフランスで発生した多条光線を放つ円盤等、最近の円盤関係のスライドも上映された。

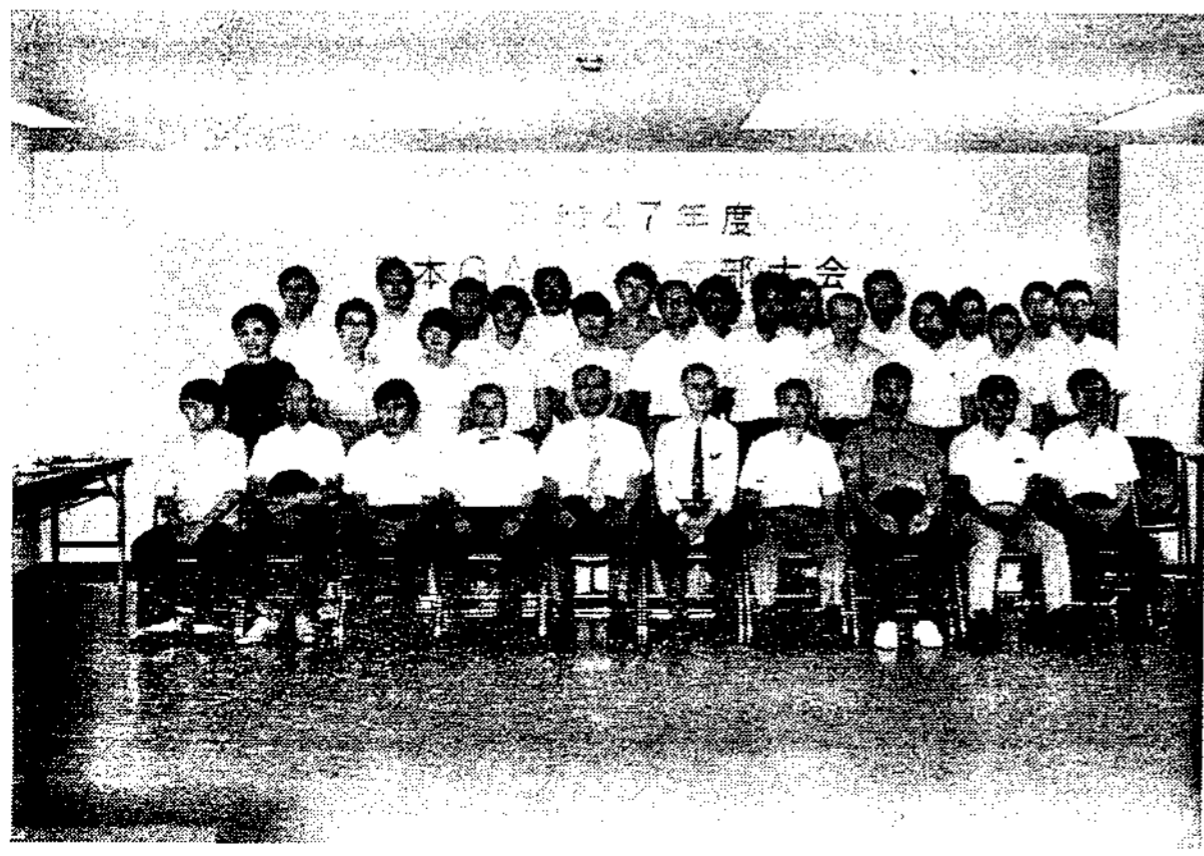
そしていよいよ先般テレビでも放映された円盤実写映画が上映される。これは当局の許可をもらった代表が十六ミリ(カラー)でテレビの画面をコピーされたものである。これは技術的に困難であったがコピーは成功した。アダムスキー撮影になる軽やかな二匹のチョウのように飛ぶ円盤や、画面いっぱい巨大な姿を見せる紺青の円盤等、迫力あるシーンが展開し、そのすばらしさに魅了される。どこからともなく飛来した一機の円盤がロドファー夫人の家の裏庭に舞い降りて、本物であることを証明するために一個の着陸用ギヤを出したりひっこめたりする光景はまさに壮観である。

すばらしい雰囲気のうち久保田代表の「宇宙意識との一体化実習法」の講演となる。代表は以前に月例会で行なった実習法ではなくて、だれにでもできるわかりやすく簡単な方法として樹木を見つめる方法を説かれた。つまり一本の樹木をきめ、それを見つめてその内部の脈動を感じ取りながら一体化して宇宙の意識を感じる練習である。この場合重要なのは実在しないものを描いてはいけないうことで、また極端な精神主義に走らず、健全な肉体の維持の大切なことも力説された。

そのあと参加者全員による記念撮影がすんでから、質疑応答、座談会へとプログラムが進行した。お菓子とフルーツジュースでくつろぎながら生命の連続やカルマに関する高遠な問題が提起され、何かを学び取るうとする真剣な空気は乱れなかった。

定刻五時に市川氏の挨拶により、大会は無事終了した。関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

(中山正史記)



# 群馬県で研究会開催



去る七月二十二日(土)太田市民会館において日本GAP群馬支部とGAP太田同好会の合同研究会が開催されました。開始時刻は午後六時、雨のやんだあいまの東の空にめずらしくくっきりとニジが出ており、この日群馬支部と太田同好会にもニジの橋がかかり、参加者十七名と予想以下ではありませんでしたが、かなりの盛況をさわめました。熊倉君の司会のもとに自己紹介、両グループの活動と歴史の紹介、行なわれ、続いて三田堯一氏の解説によるGAPスライド(七十二三)を上映。上映中荒井君より館林市郊外でのUFO目撃の際のUFO着陸

の跡と類似するスライド中数コマについての話をさみながらの上映を終り、いま会場の山場となった座談会となる。町田君より念写実験の写真の公開。荒井君よりUFO目撃談。服部君よりテレビ番組の自己体験談。三田堯一氏から透視体験談。などが話され、話題はますます深まるばかり。定刻の時間がくる頃には冷えたコーラを飲みながらの会話もかなりの熱気が感じられた。最後に、今後の組織運営については、次の日は未定ですが、合同にて集會開催と決定。一つのGAP支部にはま

とまりませんでした。合同して活動してゆくからには、いずれ日時、場所、名称その他運営についての詳細も一定にし、はっきりさせようと思っております。次いで記念撮影となる。定刻時間がせまり、町田カメラマンがあせったせい、フラッシュ不良、撮り直し二回、ずっこけ場面もありましたが、三田氏の挨拶により充実感を感じた。七月の研究会を笑い声とともに散会となりました。(久保寺信一記)

北関東地方の会員で右の研究会に参加希望の方は、左記のいずれかへご連絡下さい。

栃木県足利市藤本町五七三  
(群馬支部代表) 三田堯一  
群馬県太田市浜町四八一七  
(太田同好会代表) 久保寺信一

## 日本GAP月例研究会

### 大阪支部例会

1. 日時 毎月第一、第三日曜日の二回開催。午後一時より四時まで。
2. 会場 兵庫県尼崎市 尼崎産業郷土会館(電話〇六一四八八一三三五一)
3. 会費 いずれも百円。
4. 携行品 テキストとして第一日曜は「生命の科学」第三日曜は「宇宙哲学」を持参のこと。

### 東京例会

1. 日時 毎月第一日曜日、午後一時より六時まで。ただし一月だけは第二日曜日。
2. 会場 豊島区民センター(電話九八四一七六〇) 一) 国電池袋駅東口下車。三越デパートの裏手。徒歩三分。
4. 会費 百五十円。茶菓が出る。
5. 携行品 テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参のこと。

日本GAPは左記のとおり東京と大阪支部の二箇所月例研究会を開催して会員の精神的向上と宇宙的哲学の探求及びUFOに関する知識の吸収の場を提供しております。特にUFO関係のスライド映写も実施して貴重な資料を公開しています。都府内外近郊の方はぜひご参加下さい。

# 昭和47年度日本GAP総会開催

予告

## 集まろう！見よう！

### ロドファーの円盤映画を…

今年も恒例の日本GAP総会を開催することになりました。UFO問題やアダムスキーの哲学に関心をお持ちの方にとっては信念を強めるのに良い機会ですから、都内及び近郊の会員の方はぜひ御参加下さい。会員以外の方でもまじめな関心のある方なら御来場を歓迎します。

今度の総会では特に橋本健博士の開発になる電子装置とサボテンを用いた植物と人間の想念感応実験を行なって植物にも意識があることを証明するという興味深い実演が同博士の手で行なわれます。またロドファー夫人とアダムスキー撮影の円盤実写映画も公開いたします。円盤大写しの圧倒的な画面は皆様を魅了するでしょう。お見のがしなく！

日時 十一月十九日(日曜日)午前十時より  
午後四時半まで。

会場 東京都・豊島区民センター(国電池袋  
駅東口下車。三越デパート裏手)

会費 七〇〇円。高校生以下は四〇〇円。

(昼食は出ませんから別にご用意下さい。記念写真購入希望者は三〇〇円を会費とともに受付で前納して下さい。会費納入と同時に名簿記入の上、赤い記章を受け取る仕組みになっています)

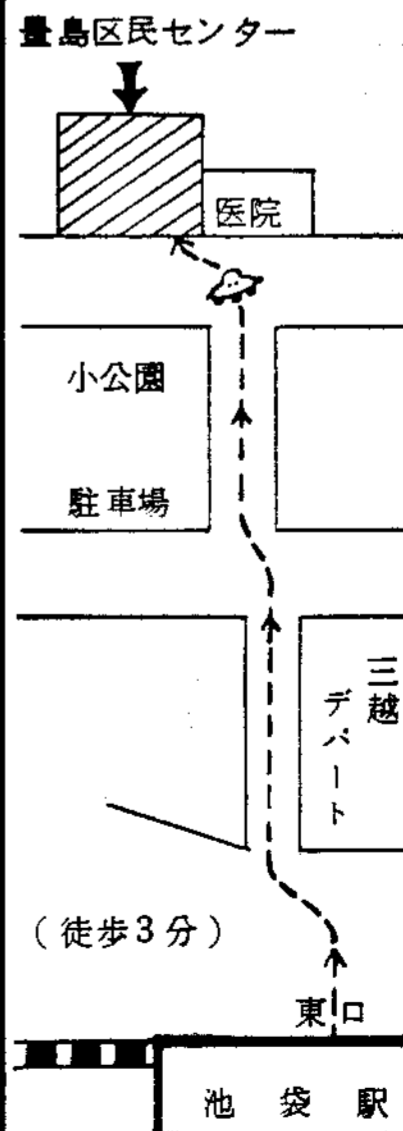
日本GAP

## プログラム

- (1) 10:00 - 10:30 挨拶 市川 宏
- (2) 10:30 - 12:00 講演 久保田八郎 「GAP哲学の意義」
- 休憩 —
- (3) 1:00 - 2:30 質疑応答・座談会
- (4) 2:30 - 3:30 実験 橋本 健 「植物との想念感応」
- (5) 3:30 - 4:00 記念撮影
- (6) 4:00 - 4:30 映画 「ロドファー夫人とアダムスキー撮影円盤」

### 注意

- ◎センター入口から奥の右手にエレベーターがあるのでご利用下さい。
- ◎定刻どおり開始します。途中入場も結構ですが、開会中は静かにして下さい。
- ◎センター内に食堂がありますからご利用下さい。付近には三越デパートの食堂その他があります。
- ◎当日会場に特設図書売場を設け、ニューズレター旧号、想念観察手帳、宇宙哲学 生命の科学(旧版) なぜ空飛ぶ円盤は来るのか(文久書林版・新刊)その他を販売いたします。





アダムスキー哲学三大名著 絶賛発売中!

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP 会員必携の書。注文は各出版元へ直接どうぞ。

G・アダムスキー 久保田八郎訳

## 宇宙哲学

¥350 70

東京都新宿区納戸町33たま出版 振替東京94804

G・アダムスキー 久保田八郎訳

## テレパシー

¥350 70

G・アダムスキー 久保田八郎訳

## 生命の科学

¥420 70

**出た!** アダムスキーの弟子でありコンタクトイでもあったフレッド・ステックリングのすばらしい体験記と哲学! 特に幼児教育について重要な示唆を与える。宇宙問題探求者必読の書!

F・ステックリング 久保田八郎訳

## なぜ空飛ぶ円盤は来るのか

¥550 85

東京都文京区白山1-29-12 文久書林 振替東京2521

を主催してこの映画を上映いたします。これは日本GAPだけが所有して公開するフィルムで、他の場所では見られませんが、ぜひご来場下さい。十一月には総会開催のために第一日曜日に行なう月例研究会は中止しました。本号の刊行を早めてこの事をお知らせするべきでしたが、間に合わず申し訳なく存じます。第一日曜日に知らずに会場へ出向かれた方に深くお詫びいたし

## 本誌旧号

本誌バックナンバー(旧号)は次のものが残っています。発行部数僅少につき残部もわずかしかありません。未入手の方は早目にご注文下さい。送料は不要。切手代用もOK。

48号・49号・50号 各¥250

## 想念観察手帳

想念印象の観察はアダムスキー哲学の中心となる実践法で、超能力開発、宇宙的哲人になるための不可欠の方法です。日本GAP特製の手帳は記入が容易で携帯に便利。飛躍的な向上が期待できる。会員必携の手帳。

¥150 25 送料は2冊55円・3冊70円・4冊85円  
5冊115円

以上は日本GAPへ直接ご注文下さい。

## 編集後記

惑星と人間」を連載いたしました。これは今までの各例会でお話した事柄に他のインフォメーションを加えてまとめたもので、今後とも興味ある内容をお伝えしますから、ご期待下さい。

クリシエナムルティイはわが国ではほとんど知られていませんが、海外では高名であり、その独特な哲学は高く評価されているとは某氏の言葉です。アダムスキーの哲学に肉迫するほどの深遠さがあります。ご味読下さい。

マデリン・ロドファー夫人撮影の円盤映画については以前本誌で紹介したことがありますが、百聞は一見にしかずで、これを見れば木の葉運動を行なう金星型円盤のすばらしい迫力に圧倒されるでしょう。

ます。

かつて本誌に連載して好評を博したフレッド・ステックリングの「なぜ彼らは来るのか」を全面的に改訂して「なぜ空飛ぶ円盤は来るのか」と改題の上、文久書林から刊行されました。ステックリングはドイツ系米国人でアダムスキーの弟子兼協力者として活躍した人で、彼が真実のコンタクトイであったことは米国GAPの主要メンバーたちが認めており、現在もGAPコーワーカーとしてメキシコで活動しています。この書は特に幼児や児童教育のあり方にすばらしい指導法を教えています。皆様の書架の宇宙関係書物群のなかに一冊をお加え下さい。なおこの書は来たる総会の会場でも販売する予定です。

本誌は次号から大体に四十頁以上とします。したがって送料は一部七〇円となりますので、次号分より会費ご納入の際は一回分につき誌代二五〇円プラス七〇円で計三二〇円となりますからご了解下さい。

◎寄付の御礼。(七月十一日以降十月二十六日まで。敬称略)安田正人(鹿児島市)一千元、中島信子(市川市)二千元、片野純而(和歌山市)二千元、佐藤テル(福島市)一千元、三田勝也(東京)一千元、中岡桂園(滋賀県)三千元、宮内温夫(ニューヨーク)三万円、守田健(堺市)一万円、浅井総一(神戸)四千元その他、波田野敬一(東大阪市)三千元、作久間憲正(浦和市)一千三百六十五円、藤原孝幸(岩国)一万円、安部雅子(山口市)四千元、古徳裕子(東京)一万円。(久)

1972・11

GAP ニューズレター 五一号  
編集発行人 久保田八郎  
発行所 日本GAP  
振替東京江川区藤崎六二二  
振替東京三五九一二久保田名義  
頒価二五〇円・送料七〇円